

「早稲田スポーツ」創刊の頃



↑ 「早稲田スポーツ」創刊号一面。昭和34年11月17日発行

平成28年10月1日 西川昌衛 (63年卒/第2代編集長)

はじめに

本稿は、早稲田大学の学生の手によって企画され、創刊から半世紀以上にわたって発行が続く早稲田スポーツ新聞の創刊期のことを書いたものである。

この文章は平成十年代の会社勤務時代に『わたしの「自分史」』として書き始めた文章の中の一部である。会社退職（平成 16 年 6 月）後に文章を追加したが、全文は未だ完成に至っていない。「自分史」の性格上、本文は外部に出す意図を全く持たずに書き出した文章であり、表現や順序などは極めて個人的な主観に基づいている。

今回、本稿を後輩諸氏に見てもらいたいと思い、平成 27 年 6 月に多少の手直しを加えたほか、新たな文章も追加し、独立した一篇にした。結果、全体として、統一性に欠ける文章になったことは否めない。しかも、書く対象が半世紀以上どころか 60 年近くも前のこと、記憶に曖昧な部分も多い。

本稿では、昭和 34 年(1959)秋の「早稲田スポーツ」の創刊前後からほぼ 4 年間のことを書いたが、ある部分ではかなり後の時代のことも書いている。自分の人生の中でも、「早稲田スポーツ」創刊の頃が極めて重要な位置を占めていることは言うまでもない。平成 28 年 9 月に再度、文章の一部手直しを行った。

「早稲田スポーツ」の発案者・松井盈が平成 19 年（2007）4 月に逝去したため、本来、ここに書くべきことの多くが未確認のままになっているのは残念である。

目次

はじめに

- 1 教育学部国語国文学科の教室で「新聞」発刊の相談
- 2 初代編集長・松井盈
- 3 体育館事務所の人々
- 4 アルバイトで創刊資金稼ぎ
- 5 創刊費用の一部を軟式庭球部監督から借用
- 6 板野寿夫軟式庭球部監督のこと
- 7 初代会長に清原健司教授
- 8 創刊号編集は部員の下宿と簡易ホテルで
- 9 担当運動部を決めた頃
- 10 創刊準備に部員一同が疲労困憊
- 11 新聞の印刷は神奈川新聞

- 12 威厳のあった大西鐵之祐秘書課長
- 13 大浜信泉総長に単独会見
- 14 1面下段のコラム「アウトライン」
- 15 「早稲田スポーツ」創刊期の仲間たち
- 16 初期広告の大半は高田馬場から大学までの商店
- 17 松井編集長の一貫した考え「各部平等に！」
- 18 昭和34年11月17日、ついに「早稲田スポーツ」創刊
- 19 安井俊雄教授（新聞学）から突然の呼び出し
- 20 「早稲田スポーツ」へ続々入部した先輩・同輩・後輩たち
- 21 二人の同期、宇野英雄と中野邦観
- 22 同学年の安武哲夫、浅野展行、下本地実と津本信博
- 23 奈良・東吉野村出身の同学部同学科の津本信博
- 24 逸材が揃った1年後輩たち
- 25 「早慶戦特集号」の発行で大議論
- 26 野球部マネジャー黒須陸男さん
- 27 石井連蔵野球部監督
- 28 「週刊現代」から取材を受ける
- 29 日本記録を作った競走部・藤井選手からの差し入れ
- 30 軽井沢・信濃追分で初の夏合宿
- 31 会津若松・東山温泉合宿に遅れる大失態
- 32 学生野球の神様、飛田穂洲さんに単独インタビュー
- 33 「早スポ」創刊号の販売は構内メインストリートで
- 34 「早スポ」販売の椅子に座った滝口宏学生部長
- 35 「早慶戦特集号」の保管はJR信濃町駅前の葬儀社
- 36 六大学球史に残る「早慶6連戦」
- 37 神宮球場で会った早稲田出身の紳士たち
- 38 4年連続で乗った早大の「箱根駅伝応援バス」
- 39 丸紅飯田の社員だった河野洋平氏
- 40 「早稲田スポーツ」草創期の広告取り
- 41 早稲田大学スポーツ年鑑」の発行
- 42 高田牧舎は運動部の梁山泊
- 43 軽井沢合宿取材
- 44 グランド坂下のおでん屋「志乃ぶ」
- 45 「早稲田学報」編集室
- 46 続・体育館事務所の人々―「早稲田スポーツ」仮部室―
- 47 体育局から「運動部創部60年記念誌」刊行の依頼

- 48 スポーツ万能の人・上野徳太郎さん
- 49 新聞印刷代の支払いに窮した頃
- 50 「早稲田スポーツ」二代目編集長に就く
- 51 野球部の友人二人
- 52 NHKラジオ「オリンピックアワー」
- 53 オリンピック 2 回出場の大沼賢治さん
- 54 五輪金メダリスト・織田幹雄さんに渡し損ねた謝礼
- 55 同期の運動部マネジャー群像
- 56 体育局からの就職のはなし
- 57 頓挫した「野球部創部 60 年誌」の発刊計画
- 58 早稲田で大活躍した教育実習の生徒・谷澤健一
- 59 思い出の飲食店点描
- 60 卒業後 30 余年、朝日・運動部記者の取材
- 61 サッカー川淵三郎さんと「早稲田スポーツ」

あとがき

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

<注> この原稿は、「早稲田スポーツ」創刊に携わり、第2代編集長を務めた西川昌衛さんが「自分史」として書き残したものです。

したがって、早稲田スポーツ新聞会と離れ、個人的なエピソードも多々ありましたので、一部削除しました。しかし、西川さんの学生時代の「思い」を伝えるため、残した部分も少なからずあります。

**また、読みやすいように、漢字を開いたり、文章に手を入れたりしています。
(文字数が 24 万字という大著のため、3部に分けることにしました)**

1 教育学部国語国文学科の教室で「新聞」発刊の相談

昭和 34 年 4 月、早稲田の教育学部国語国文学科に入学した。私たちは国文科の三組目（C 組）で、2 ヶ月もすると、親しくなって話をする仲間が絞られてきた。そのうちの一人に小柄で元気の良い松井盈（横浜緑ヶ丘高）がいた。

ある日、授業が終わると、彼が突然、自分（獨協高）の所に来て「実は相談があるんだ」と話しかけてきた。5 月か 6 月の頃だったと思う。自分はその頃、せっかく国文科に入ったのだから、文学関係のサークルに入ろうと決めていた。

松井は開口一番「新聞を作りたいんだ、ついでには相談に乗ってくれないか」と言った。そして、「明治には立派なスポーツ専門の学生新聞がある。学生スポーツにかけては早稲田のほうが先輩格なのに、なぜ、早稲田にスポーツ新聞がないのか不思議だ。ぜひ一緒にやろう」と、訴えるような眼をして話した。松井はその構想を真剣に話したのだろうが、あまりに突拍子もない話だったので、その真意が自分には分からなかった。

彼が言うには、高校で付き合っていた女性が明治に入り、「明大スポーツ新聞部」に入った。彼女の話を知ると「明大スポーツ」の活動が実に面白い。学生スポーツを取材し、記事を書いて新聞を作っている、という。この話を聞いて、松井は早稲田にはない、学生スポーツ専門の新聞を作りたいという気持ちが高まってきたようだ。しかし、新聞を一人で作るわけにはいかず、仲間をできるだけ多く集めたい、と言う。

松井がなぜ自分に絵空事のような構想を話しかけてきたのかは分からない。

自分は中学時代、3 年生の 1 年間だけ野球部に所属し、田舎の中学校の試合に出ただけのスポーツ経験しかない。もちろん、新聞制作の経験は全くなかった。強いて思い出せば、中学時代にクラスの中で、壁新聞を作ったことがあった。そんな話を松井に言うと、彼も高校で軟式庭球をしていたが、新聞制作の経験はないと言う。二人とも新聞作りは全くの素人であった。

後に知ったことだが、松井には、明治大学に進学し、スポーツ新聞を作っている彼女（元恋人）を見返してやろうという思いがあったようだ。しかし、彼はそんな素振りも少しも見せなかった。話をしていくうち、彼の熱意に打たれて、このアイデアに乗っても良いかなと思うようになった。新聞作り未経験の男二人がスポーツ新聞を作ろうというのだから、まさに「怖い物知らず」以外の何物でもなかっただろう。

松井は自分に新聞創刊の話をする前、クラスの何人かに同じような話をしたが、全くの無反応か、拒絶反応ばかりであったと言う。まともに話に乗ったのは自分だけだったらしい。

自分は松井の構想に賛同し、自分でもクラスで勧誘活動を始めた。しかし、大学に入学してまだ間もない頃であり、大半は気乗り薄であった。大学でスポーツ新聞など作っても成り立つわけがないだろう、というのが一致した意見だった。

二人の熱意が勝って参加だけはしてみよう、という反応が出てきたのは勧誘を始めてから1ヵ月近く経ってからだった。私たち二人を含めて、6人が集まったのは夏休みに入る少し前だった。いずれも、英語の授業で、近くに席をとっていた者ばかりである。松井、西川に加え、東京出身の山崎茂（志村高）、神奈川の前田貞雄（横浜日大高）、福岡の福山龍介（三池高）、福井の本多統（丸岡高）の6人である。みんな国文科の3番目のクラスC組（当時、50音順にクラスが決まった。C組は、な行から始まっていた）のクラスメートだ。

2 初代編集長・松井盈

新聞の名前は早くから「早稲田スポーツ」に、クラブの名称は「早稲田スポーツ新聞会」に決めていた。当然のことながら、新聞創刊を提案した松井を編集長にすることは全員一致で決まった。しかし、いくらスーパーマンでも、一人で創刊までこぎつけることは不可能だ。自分が編集長を支えようと決意した。

松井には、少しの手抜きもせず、「絶対に創刊するぞ」という使命感に溢れていた。松井に従った自分にも同様の使命が課せられたと思った。

松井は不思議な男である。普段はおっとりしているのだが、いったん自らの信念を表明すると、いくら反論されても譲らないほど頑固だった。彼は現役入学のため、浪人の自分より年齢は1歳下であったが、そう思わせない強さがあった。

松井との交際は先に書いた通り、「早稲田スポーツ」の構想段階に始まって、創刊準備、編集作業、広告取りだけでなく、大学在学中のほとんどを共に過ごし、卒業後、家族を持ってからも付き合いは続いた。

彼は「創業者」の役割を徹底して果たし、独得の魅力を持って部員を牽引していった。彼の精神的な強さが「早稲田スポーツ」のバックボーンとなったことは「ナポレ松井」（私の辞書に不可能という字はないと言ったナポレオンを略してナポレ）と後輩から付けられたニックネームに表されている。彼の強烈な個性に合わないと思った人は静かに去って行くしかなかった。松井の強い性格が「早稲田スポーツ」の発刊を成し遂げ、創刊前に「長く続くわけではない」と不安視されていた「継続の道」を切り開いていったのである。

二人はまず、大学から資金的な援助を得られるかどうかについて考えた。

窓口は、勝手に体育局だと思い、すでに記念会堂の横の新しい建物に入っていた新しい体育局に行った。窓口には年配の事務員に新しく作る新聞の簡単な趣旨を言い、体育局へ援助のお願いに来た旨を告げたが、彼は、大学の裏門に体育館があり、その1階に事務所があるので、そこへ行ってくれと言った。

体育館の事務所は早稲田の運動部の管轄部門だと説明してくれた。体育館は、歴史を感じさせる堂々とした、3階建ての建物だった。1階に柔道場がり、外からも良く

見えた。2階、3階にもいくつかの運動部の道場や練習場が入っているという。

事務所は体育館の正面の入口に入って直ぐ右手にあった。二人で恐る恐る扉を開けると、男たちが一斉にこちらを向いた。いつもは運動部の顔なじみの学生が来るのに、突然、見知らぬ学生が入ってきたので、驚いた様子であった。この体育館事務所訪問が、大学当局と折衝する最初の経験となった。

3 体育館事務所の人々

体育館事務所は10坪ほどの狭い場所で、事務員が3、4人、窮屈そうな形で机を並べていた。なかでも一番奥に座る堂々とした体躯の人が目についた。彼は、若い事務員（センちゃんと呼ばれていた）に、いろいろ指示を出していて、「センちゃん」は謄写版に向かったり、電話をしたり、忙しそうに働いていた。そして、事務所にはひっきりなしに運動部のマネジャーが出入りしていた。

最初に私たちの話を聞いてくれたのは、ナンバー2らしき人で、鈴木さんと言った。細身の眼鏡をかけた神経質そうな人だった。最初は冷たい印象を受けたが、何でも話を聞いてくれた。鈴木さんは、私たちの話を聞くと、「堂々とした人」に話を通してくれた。この人が事務所の責任者・村田光敏さんだった。村田さんの叔父は、早稲田出身の関取、笠置山だった。笠置山のインタビュー記事が、当時の「早稲田スポーツ」に掲載されているが、村田さんに頼んで取材が実現したのだろうと思う。笠置山は関取時代、インテリ力士として有名だった。村田さんの体躯が相撲取りのような堂々としていたのは、家系の成せる業だったかもしれない。

応援部OBの田古島浩さんが着任するのはしばらく後で、鈴木さんの後任だった。村田さんと田古島さんに、「早稲田スポーツ」は計り知れないほど世話になった。体育館事務所の人たちが、親切に話を聞いてくれ、何やかやと面倒を見てくれたことは、新聞作りにとって、実に幸運だったといえる。

ただし、資金的なことではかなりシビアなことを言われた。「そもそも、早稲田大学の精神とは」から始まって、「最初から大学の支援をしてもらえらと思っていたら、大間違いである」と、お説教された。

さらに、「この大学では学生は何でもやれるが、やるからには自ら責任を持ってやらなければならない。特に、資金のことはいくら言っても、大学からは出ない。新聞を作りたければ、資金も自分たちで調達しなさい」と、後で考えれば当然のことを懇々と言われた。それでも、「早稲田にはスポーツ専門の新聞はないので、『早稲田スポーツ』は非常に良いアイデアだ」と誉めてもくれた。「資金以外の協力は十分にするので頑張れ」と最後は激励された。この田古島さんの言葉にどれほど勇気づけられたことか、やる気はさらに高まった。

事務所が開いている間は、いつでも机を使ってもいい、謄写版も電話も自由に使っ

ていい、という許可も出た。これは、部室のなかった私たちには最大の支援と言ってもいい。広告取りにしても、大会社に勤めるOBとの取材アポイントを取るにも、電話をかけることが最初である。体育館事務所で電話をかけまくったことが今日の「早稲田スポーツ」の基礎を築いたと言っても過言ではない。

村田さんが「体育局の赤松保羅局長に会って、相談してみては」と言ってくれたので、松井と二人で体育局に行った。局長室は体育局建物の上層にあった。ここでも私たちは、「早稲田スポーツ」の計画を長々と説明した。赤松局長は飄々とした感じの心理学者で、年齢も60歳を超えているようだった。寡黙な人だったが、私たちの説明には熱心に耳を傾けてくれた。

そして、「早稲田には各分野にさまざまな先輩がいるので、資金的にはそうした縁を積極的に活用すべき」とのアドバイスをいただいた。必要があれば紹介状も書出し、電話もすると行っていただき、前途が開けたように思った。

しかし、新聞制作に取りかかってみると、その厳しさを思い知らされた。資金問題、取材の方法、記事の書き方、割り付けの仕方、全てにおいて素人集団であり、新聞作りはなかなか進まなかった。

4 アルバイトで資金稼ぎ

夏休みに入るまでに、学内でできることをこなしていった。新聞制作については先輩格である「明大スポーツ」の鈴木宏編集長に教えてもらうことにした。松井の高校時代の恋人で「明大スポーツ」部員だった女性（先述）に頼んで実現したのだった。ところが、指導をしてもらうにも場所がなく、日頃使わせてもらっていた福山の諏訪町の下宿を使わざるを得なかった。下宿は静かな住宅街にあって、夜ともなると、周囲は街灯もあまりない暗い場所であったため、部員が高田馬場駅まで鈴木さんを迎えに行った。

夏休みに入る直前、体育館近くの喫茶店「凡」にみんなで集まり、松井が中心になって今後のスケジュール、行動計画を考えた。秋までには創刊したいこと、そのための資金集めを何としてもやらなければならないことなどを確認した。それぞれ、アルバイトや旅行の計画を持っていたが、新聞創刊を成し遂げるには、どうしても全員一丸となった協力が重要だと力説する松井の発言には説得力があった。いろいろ難問も出たが、結局、画期的な事業に挑戦するのだから、全員が「創刊資金」を出そうということに一致した。夏休みは、それぞれアルバイトをして、その金を創刊資金にすることにした。

部室がないため、夏休み中、部員の集合場所は御茶ノ水駅前の喫茶店（店の名前は忘れたが、ミロだったかもしれない）にした。アルバイトをするにも、広告をとるにしろ夕方、早稲田まで出てくるのは時間的に難しい、というのがお茶の水に決まった

理由だった。部員は毎夕あちこちのバイト先から、御茶ノ水の喫茶店に集まるのが習慣になった。自分は交通至便な東京駅前の中央郵便局にアルバイト口を見つけた。東京駅は家から出かけるにも、お茶の水駅前行くにも便利だった。時期は多少ずれるが、神田神保町の小学館の倉庫での仕事もあった。東京中央郵便局でのアルバイトでは珍しいことがあった。仕事は郵便小荷物の仕分け作業だったが、この中で極めて効率的に仕事をする太った男が、アルバイト部隊を仕切っていた。無口な男で顔も厳めしかったので、あまり話をしなかった。ところが、「早稲田スポーツ」の取材のため、柔道部に行ったとき、アッと驚いた。中央郵便局にいた男がいたのである。アルバイト中も親しく話をしていなかったため、この再会時にも「やあ」と互いに言ったぐらいで別れた。仕分け作業は、かなりきつい仕事だったが、体格が良い柔道部員にとっては、楽な仕事だったに違いない。当時は、運動部の選手たちも、アルバイトをして学資稼ぎをしていたのだ。

松井と自分は、時折、体育館事務所に出向いて、中間報告をした。実は、それを口実に、タダで使える電話をするためだった。電話で、大学の先輩、それも見ず知らずの大会社に勤める先輩にアポを取り、「広告をください」と会社に行ったのである。いくら、後輩といっても、飛び込み同然の広告取りの成功率は極めて低かった。

早稲田で議論するときは、喫茶店「凡」をよく使った。夏休み前は「凡」に入り浸っていた。その店には私たちの新聞に興味と理解を示すウエートレスがいた。いつも着物を着た女性で、年齢は私たちより上のようなだった。彼女を目当てに、「凡」に通ったと言えるかもしれない。コーヒー1杯で、長時間いても、苦情を言わなかった。文学好きの女性で、作家の話をした記憶がある。私たちも抜け目がなく、ちゃっかりと「早稲田スポーツ」紙上に喫茶店「凡」の小さな広告をもらっていた。和服の彼女から、店主に広告の話が伝わったのだろう。3軒四方の小さな記事中の広告はかなり長期間続いていた。

5 創刊費用の一部を軟式庭球部、板野監督から借用

何と言っても、広告取りが難しかった。見本紙もないのに広告を出して欲しいと言うこと自体、無茶なお願いだった。口頭で「早稲田スポーツ」の説明するのは、実に難しかった。「どんな新聞だか分からないのに、広告を出せというのは、虫が良すぎるよ」と言う人もいた。私たちの説明だけでは、店主や会社の上層部を説得できないと言う。そんな話の連続で、納得して広告を出してくれた人はいなかった。

その無茶な広告取りを、高田馬場駅前から大学の近くまで、道路の両側の店を回って歩いた。部員6人が手分けして、店という店を1軒、1軒回った。新聞創刊のためには資金が必要だという強い思いだけで、ひたすら歩いた。ところが、その頃の早稲田界隈の商店には学生が広告取りに来ることに慣れている人がまだいたのである。熱心に説明して何軒か回るうち、話に乗ってくる店主も出てきた。その数は知れたもの

だったが、「君らの根性に負けた、小さなものなら出すよ」と言ってもらえたのだ。その言葉がどんなに嬉しかったことか。創刊の頃は、そんな努力をして、小さな広告を集めたのだった。

しかし、それだけではとても新聞を発行する資金にはならない。ついに松井と二人で、軟式庭球部の板野寿夫監督に資金提供（借金）のお願いに行こうということになった。松井は体育実技で、板野さん担当の軟式庭球をとっていた。松井は実技の終わった後、何回か板野さんに「早稲田スポーツ」創刊の話をしていたと言う。

私たちは神田小川町にあった板野さんの会社（ウララネオン）を訪ねた。体育局から紹介状をもらって行った記憶がある。自分は板野さんに会うのは初めてだった。板野さんは会社経営者らしく、貫録十分、堂々とした体躯の持ち主だった。会社はネオンサインの製作会社で、業界では有名な会社であった。私たちの話に熱心に耳を傾けていた板野さんは「分かった、君らの情熱にかけていくら貸す、借用書を書け」と言った。会って間もない学生に金を貸すという「即断」に、こちらが驚いた。私たちは借用書を書き、印刷費の一部としての資金を借りた。2万円だった。

6 板野寿夫軟式庭球部監督について

板野さんから借金してスタートした「早稲田スポーツ」には、常に資金的な問題が付きまとった。いくらか落ち着きが出たのは1年以上経ってからだった。その間、部員全員が必死で広告取りに邁進した。当時、大学構内には安保反対の立て看板が林立していて、構内の新聞販売に大きな期待は持てなかった。広告だけが新聞の基盤を安定させるものだった。そうした環境の中で、板野さんの「融資」がどれほどありがたかったか、計り知れない。

ウララネオンにはその後もたびたび訪問して「早稲田スポーツ」の現況報告を行った。自分は、暇があると神田神保町に行って、古書店を回っていたので、神保町の先の小川町を歩いていると、ウララネオンの前を通る。こんな時、自然に頭を下げる習慣がついたものだ。

私たちがウララネオンを訪問すると、板野さんはいつもにこやかな顔で奥から出てきた。また、社長に取り次いでくれる妹尾さんという人が良い人だった。社長の大学の後輩ということもあったのかもしれないが、その後もなにかと助けてもらった。当時の板野さんの太った体躯からは、かつて有名なテニス選手だったという面影はほとんどなかった。

板野さんの性格は真面目で、話す内容も正論だった。軟式庭球部の監督なのに、私たちの前では、部の話や自身のテニス選手時代の話はしなかった。よく日本経済や株式市場について、話をしていた。

目黒区の緑ヶ丘にあった板野さんの邸宅を訪問したことが一度ある。ウララネオンの妹尾さんから、板野さんが体調を崩し、家で臥せっていると聞き、松井と一緒に見舞い

に行ったのだ。この時、跡継ぎを紹介された。

「この男は東工大出なんだ」と言った嬉しそうな顔が印象に残っている。板野さんは、技術系の息子さんに継いでもらえることが、よほど嬉しかったのだろう。

板野さんからの借金は、早慶 6 連戦の後、完済した（後述）。後日、元気なうちに返済できて良かったね、と松井と話した。「早稲田スポーツ」の産みの親同様ただだけに、もっと長い付き合いをしたい人だった。

7 初代会長に清原健司教授

「早稲田スポーツ」の初代会長は、赤松保羅体育局長の推薦もあって、早い段階から体育

局教務副主任の清原健司文学部教授に決めていた。清原教授も快く会長職を引き受けてくれた。清原さんは文学部の教授であったため、私たちは新聞の創刊話が出るまでは会ったことがなかった。会長に就いてもらうことが決まってから、体育局の教務主任室で会ったのが初対面だった。極めて真面目な人で、専門は心理学、中でもスポーツ心理学や異常心理学が専門であると言う。がっちりした体格だったので、何かスポーツをやっていたのかと思ったが、「私は運動部出身ではないよ」と先に言われた。旧制上田中学（長野県）から早稲田高等学院へ入り、文学部に進んだと言っていた。住まいは大学から歩いて 10 分ほどの、閑静な住宅地にあるマンションの 4 階だった。

新聞を創刊してからも松井と自分はことある毎に清原さんに会いにいった。気軽に会える人だった。体育局で会うより、自宅で会うことが多かった。清原さんも私たちの訪問を快く受け入れてくれた。奥さんは静かな人で、書斎にお茶や茶菓子を運んでくるがあまり話には加わらなかった。松井と二人で清原さんの自宅には、月に数回は行っていたと思う。

「早稲田スポーツ」の創刊当初は清原さんに相談することが多かった。困った時には、何でも清原さんに相談する癖がついてしまった。例えば、資金問題、体育局との関係、運動部との接触等について、聞くことは山ほどあった。しかし、私たちは最大の難問である資金の話は極力避けようと決めていた。話をすれば、先生は気にするに決まっているからである。二人は先生の前では深刻な顔をしないようにした。しかし、清原先生は、私たちが資金的苦境に立っていることを案外知っていたのではないと思う。

清原さんは酒が好きで、よく、「グラウンド坂下の志乃ぶで待っているから」との伝言が体育館事務所にあった。あまり酒が飲めない松井と二人で安部球場下の横丁にある「志乃ぶ」へ行くと、先生は決まって同僚と思われる人と一緒に飲んでいて、二人が店に入ると直ぐに同僚との話を打ち切り、私たちの方にやってきた。私たちは決まっておでんや焼き鳥を頼み、酒はほんの少しだけ飲んで、あとは飲んだ振りをしていた。先生はかなりの酒豪であったが、たまに飲みすぎてフラフラと店の外に出ることがあった。そんな時は二人で巨漢の先生を支えて家まで送って行った。

マンションにはエレベーターがなく、階段を上るしかなかった。階段も狭く巨漢の先生を支えながら上る階段の何ときつかったことか。玄関を開けると、奥さんが申し訳なさそう顔をして迎えてくれた。

清原さんのマンションに行くと、必ず4畳半ほどの書斎に通された。身体が大きい先生が真ん中に座ると、書斎は一層狭く感じられた。時折、二人のお嬢さん（絵里、音里さん）が顔を出した。狭い書斎での「早稲田スポーツ」談義は今となっては懐かしい思い出である。清原さんの話は、運動選手が試合に臨むときの精神的な感情論になることが多かった。清原さんの専門は、スポーツ心理学や異常心理学だと言った。書斎で先生の話聞くのが二人だけだったため、ゼミ以上の説得力があった。この話を通じて、先生にはスポーツ心理学の立場から、「勝負心理考」を連載で書いてもらうことにした。狭い書斎の中での収穫だった。もちろん、原稿料はなかった。

もう一人、原稿料なしで文章を書いてくれた教授に上野徳太郎さんがいたが、先生のことは別項で取り上げたい。

8 創刊号編集は部員の下宿と駅近くの簡易ホテルで

新聞作りをしたことがない者ばかりが集まって「早稲田スポーツ」を始めたため、最初の頃の編集は無茶苦茶であった。印刷所に決めてあった神奈川新聞社からもらってきた「新聞づくりの手引き」のような簡単な冊子を読んだだけで、新聞を本当に作れるのか、自信どころか不安しかなかった。

何はともあれ先輩格の「明大スポーツ」の人に話を聞こうということになった。「明大スポーツ」編集長の鈴木宏さんが出向いてくれ、新聞作りのイロハを教えてもらうことになった。部室のない私たちは毎夜毎夜、福山が借りていた諏訪町の下宿を編集会議用に使っていた。福山は迷惑だったに違いない。無我夢中で新聞の創刊を目指していた私たちには、福山の気持ちを忖度するだけの余裕はなかった。

鈴木「明大スポーツ」編集長の説明は、細かいところまで具体的だった。この時、「明大スポーツ」は体育会の機関紙であり、資金的な心配がないので、経営的には問題がないと聞かされた。「資金も部室もない、ないないづくしで新聞を創刊する」という私たちの説明に鈴木さんはあ然としていた。同時に、大学からの援助もない中で、スポーツ新聞を発行しようとするのは、いかにも早稲田らしいと、激励してくれた。「私たちには、とてもできない」と感心もしていた。最後は、「新聞作りは金がかかるから、これからしっかり広告主を確保しないと続かないよ」と念を押していた。

福山の下宿ばかりを編集用に使えないので、仕方なく高田馬場駅近くの簡易ホテル（いわゆる「連れ込み」）に行ったことがある。山崎が探してきたもので、何しろ部屋代が安い。西武新宿線の線路沿いにあり、電車の騒音が直接部屋に入ってきた。私たちは最初、静かに割付や原稿書きをやっていたが、夜中に大声で議論をしたり、飲み食いしたりしているうち、突然ドアが開き、中年の女性が現れて「ここでは静かにし

てください!」ときつい顔で叱責された。それからは静かに原稿を書き、午前0時頃には引き上げた。いかがわしいホテルを使うことには抵抗もあり、間もなく行くのをやめた。

9 担当運動部を決めた頃

「早稲田スポーツ」の創刊準備が始まって、私たちは実際にどこを取材し、何を書くのか、ほとんど知らなかった。ただ、明治に「明大スポーツ」が存在しているのに早稲田にスポーツ新聞がないのはおかしい、是が非でも出そうという意欲しかなかった。松井が「明大スポーツ」の実物を持ってきて、目の前に置いたとき、輝いて見えたことだけは、はっきり覚えている。

新聞の創刊準備を始めてすぐに、大学当局（体育局）へ、挨拶と新聞の説明をしに行った。同時に、6人しかいない部員の担当運動部を決めることにした。早稲田には応援部を含め体育局に所属する39の運動部がある。それを部員6人に振り分けることだった。みんなで喧々諤々の議論をしたが、いざ担当運動部を決める場面になると、案外あっさりと決まった。松井が主導権を握っていたので、彼の意見は尊重された。裏を明かせば、事前に、彼から何部を担当したいか、という打診があったので、中学時代の1年間しか経験のない野球部在籍の話をして、野球部担当を希望した。自分のわずかな経験がモノをいったかどうかは分からないが、自分の担当は野球部になった。これが、その後、長い期間、神宮球場に通うという結果にもなった。自分の事前準備と言え、早稲田野球部の歴史を書いた本を見つけて読むことだった。他に自分が最初に担当になった運動部はスキー、バスケットボール、バレーボール、自動車などだった。

わずか6人の部員で、39の運動部を取材することは大変というか不可能に近い。それでも6人が分担して各運動部を持つという方法しかなかった。

松井は高校時代に軟式庭球をやっていたが、その頃はサッカーが好きで、二人の話し合いの中では、サッカーを担当したいと言っていた。この時期の部内は忙しくても穏やかで和んだ空気があった。その後、編集方針を巡って、松井と自分が甘泉園の広場で力づくの争いまでしたこと、かなりの頻度で揉めていたことなど、まるで想像もできなかったほどだ。松井はサッカーに加え、テニスなどを担当した。二人で話をすると案外、部員6人の担当は早く決まった。

担当の原案作りは、喫茶店「凡」で行ったが、話し合っているうち、二人には高校を転校しているという共通点があることが分かった。端から見れば何ということもないことだが、二人には重要な出来事に思えて話が弾んだ。松井は岡山操山高校から横浜緑ヶ丘高へ、自分は東工大付属工高から獨協高へと転校していた。松井の場合は、親の仕事の関係での転校だったが、自分は工業高校にいながら、理数系が嫌いなこと

が原因だった。東工大附工高への入学早々、クラスの小柄な男から野球部への誘いがあった。しかし、朝から晩まで苦手な数学や理科との格闘に追われる身では、入部どころではなかった。高校の転校は他人が想像する以上に大変で、心に重い傷のようなものが残った。そうした傷も「早稲田スポーツ」をやりだしてからはいつの間にか消えていった。

自分が野球部担当となってからは、伝統ある早稲田の野球部の取材が出来るかどうか、かなり不安になった。なにしろ、こちらは大学入学早々の1年生である。

新聞がない段階で選手の取材をするのだから、取材交渉は大変だった。あらかじめ、接触をしていた野球部の取材はできたが、他の部の取材は困難を極めた。マネジャーに会いに行っても「君たちは何者だ」、「今は忙しいんだよ」、「そんな新聞が早稲田にできるわけがない」、「体育局は知っているのか」など、まるで押し売りを追い返すような言葉も出てきた。広告取りよりも運動部の情報をとる方が難しいとさえ思った。マネジャーの多くがスポーツ新聞の創刊に疑問を持っていたのである。当時、学内で新聞と言えば、「早稲田大学新聞」を指していた。

私たちは邪険にされながらも、めげずにマネジャーのもとに、何度も通った。そうするうち、何と言ってもお互い同じ大学の学生同士だから、徐々に打ち解けてきた。運動部を取材する窓口はマネジャーだが、皆さんは任務をたくさん抱えている。私たちの取材に対応することで、仕事がさらに増えて困っていたのかもしれない。特に所帯の多い野球部、ラグビー、サッカーなどのマネジャーは人間関係だけでも相当なエネルギーを要している感じだった。有名監督のいる運動部の場合、一般の新聞や雑誌テレビなどからの取材も多く、多忙を極めることになる。さらに、マネジャーの重要任務の一つに資金管理がある。マネジャーはいつも金を入れるポーチや鞆を小脇に抱えているものだった。

何回かマネジャーに会ううち「お茶でも飲もう」と言ってくれる人も出てきて、取材が楽しいものになっていった。彼らからは、「早稲田大学新聞はどうして学生スポーツのことを書かないのかね」という言葉がしばしば出てきた。確かにインカレや全日本などで優勝しても、大学新聞が記事にしたことはなかった。運動部の不満はかなりある、そこに「早稲田スポーツ」の存在意義があると、自信を深めることになった。

10 創刊準備に部員一同が疲労困憊

新聞を発行する前、すでに広告取りや資金の問題でさまざまな苦勞があり、部員全員、精神的に疲れ果てていた。それに、これまで文章をあまり書いていない人間の集まりだったから、新聞記事をどう書くのか、分からなくて困った。広告は、大学周辺の商店でいくつか出してもらえた。大学からの紹介で、先輩が経営する会社や先輩が勤めていた会社からの広告も少し入ってきた。「明大スポーツ」鈴木さんから、新聞記

事の書き方は教えてもらっていたものの心許なかった。その不安が消えたのは、実際に学生スポーツを観戦し、取材し、それを文章にしてからだった。

広告取りに明け暮れている一方で、新聞の内容をどうするかで、部員 6 人がお互いの意見を言い合った。すでに、松井が言う「体育局に所属する運動部を平等に扱う」が基本方針に決まっていた。しかし、これがなかなか難しい問題であった。当時、運動部は 39 部あった。これだけある部を満遍なく取材し、しかも紙面で平等に扱うことが本当にできるのか不安だった。

「早稲田スポーツ」が「部」(最初は同好会、創部したばかりの会はいきなり「学生の会」としての認可は無理だった)としての体制が整うに従って、松井と自分に山崎を加えた三人はさまざまなことに対処しなければならなかった。「早稲田スポーツ」を正規の「会」として学校に届けを出すこと、体育局の局長以下、事務方の職員に至るまで、今後の協力依頼など、やることが目白押しであった。私たちは、体育館事務所の一角を、自由に使わせてもらっていたが、その際、事務主任の村田光敏さんの好意はありがたかった。運動部のマネジャーと変わりなく接してくれたばかりではなく、「何の遠慮もいらないよ」と言って謄写版や電話を使わせてもらった。この便宜が「早稲田スポーツ」創刊のために、どれほど役立ったか計り知れない。部屋で働く 4 人も同様に接してくれた。体育館事務所で働く人たちの好意こそ、早稲田スポーツの成功につながったものと深く認識している。

早稲田通りから大学構内に入るには西門が一番便利であることは今も昔も変わりが無い。100 ほど細い道を歩くと左手に体育館があった。1 階に柔道場があり、直ぐ左手に事務所に入る扉があった。体育館の表には「体育館事務所」と書かれた大きな筆文字の看板がかかっていた。誰が書いたのか、村田さんや田古島さんに聞くのを忘れた。事務所はそれほど広い場所ではない。奥まった所に事務所で働く人たちの事務机が置かれていた。その手前が一つの部屋になっていて、中央には長方形の大きなテーブルが置かれていた。このテーブルこそ、「早稲田スポーツ」の仮の事務所であり、私たちにとっては、新聞を作り出す「工場」というべき由緒ある場所になった。大きなテーブルは、実に便利で、会議をすることも原稿を書くこともできた。さらに、部屋の隅に置いてあった電話が、どれほど役に立ったことか、私たちには、かけがえのない「武器」だった。

また、このテーブルにいと、運動部のマネジャーが入ってくるのが分かる。すると、事務所の人が気を利かせて、彼らを紹介してくれた。当初、大学から正式に所在場所を決められていない(部の正式な場所の届け出ができない)ため、体育館事務所の入口には私たちの部名が表示されていなかった。だから、マネジャーの中には、得体の知れない学生たちがたむろしていると、怪訝に思った人もいたに違いない。

わずか6人で、39 運動部の動向を追わなければならない。部員 6 人がそれぞれ 6 つから 7 つの運動部を受け持つことになっていた。特に人気の高い野球やラグビー、サッカー、テニスなどの部の場合、部員数も多く、試合情報も自然と多くなる。さまざまな試合を見て、記事を書くことは大変だった。また、全ての運動部の試合を見に行けるわけではない。どの試合に記事として取り上げる価値があるのかを決めるのは担当部員だった。地方での試合の場合、大事なことはマネジャーとのコンタクトだった。あらかじめ話をしておいて、帰京した後に取材をするほかなかった。学生スポーツは土・日の試合が多い。同日にいくつもの運動部の試合がぶつかるケースも多かった。身体は一つしかないので、試合の状況は、翌日か翌週にマネジャーに話を聞いて書くことが普通だった。

学校に「部」(同好会)としての届出を行った後、「早稲田スポーツ」の「部章」(徽章)を作ろうということになった。当時の一般学生はまだ学生服を着ている時代で、運動部はもちろん、運動部以外でも、それぞれの部のマーク(徽章・バッジ)を学生服の襟につけていた。「早稲田スポーツ」の部章を決めるに当たって、いつもの喫茶店「凡」の店内で喧々諤々の議論をした。誰の発案だったか忘れたが、結局、新聞を表すペンと大学の頭文字Wを組み合わせる案が採用された。学生服を着用しない今の学生たちは果たして部章をどう扱っているのだろうか、いささか気になる。

創刊号を出す前に秋の早慶戦があった。当時の学生スポーツの花形はやはり野球であった。プロに負けない人気があり、早慶戦ともなれば、神宮球場を満員にする約 5 万人のファンを集めていた。その年(昭和 34 年)の秋も早慶戦は優勝に絡んでいた。その前に、創刊できれば、売れただろうし、宣伝にもなっただろうと思う。

しかし、私たち素人集団の作業効率が悪く、早慶戦前に発行するのはどう計算しても無理だった。残念ながら、比較的早い時期に早慶戦前に出すことは諦め、早慶戦が終わった後に「早稲田スポーツ」創刊号を出すという計画を固めた。原田と山崎は共に夜のアルバイトが続き、福山と本多は熱心に新聞作りに取り組んでいたとは思えなかった。朝から晩まで新聞作りに取り組んでいたのは松井と自分の二人であった。こんな状態では、10 月に発行することはとても無理で、11 月の創刊がやっとだったのである。

スポーツを扱わない「早稲田大学新聞」が早慶戦だけ特集を組み、神宮球場で大量販売していたことも分かっていた。大観衆を集める早慶戦当日に神宮球場で新聞を売れないことの悔しさが二人の胸に刺さったのは当然であった。

早慶戦の結果を一面にした 11 月号が創刊号となった(扉のページ)。

大学に入ったばかりの学生にとって、生活のすべてを「早稲田スポーツ」発刊のために費やすことはきついことであった。早稲田に入ったら、あれもやりたい、これもやりたいと思っていた自分にとって、新聞を創刊するためだけに、なぜこんなに厳

しい作業をしなければならないのかと自問し、挫けそうになることがしばしばであった。

11 新聞印刷は神奈川新聞印刷所

「早稲田スポーツ」の印刷をどこでやるのか。松井が新聞発行の構想を言い出した時には決まっていなかった。頭の中には「新聞発行」の4文字だけが入っていて、発行に至るまでに何をすべきかについては、ほとんど頭に入っていなかった。そのうち、松井の母親・澄子さんが、横浜・馬車道にあった神奈川新聞社が外部の新聞印刷をしているという話を持ってきた（詳細は後述）。神奈川新聞社では自社の新聞を印刷するほかに、外注部門があり、学生新聞や各種団体の新聞などを請け負っているという。その印刷所も神奈川新聞社の本社ビル内にあった。

印刷所には、新聞創刊を決めてから、松井と自分と山崎の3人で、何度も行った。当時、国鉄の京浜東北線の終点は桜木町駅だった。桜木町駅から神奈川新聞社までは歩いて10分ほどの距離だった。駅から新聞社までの道路脇はまだ、戦後の荒廃期の名残が残っていて、駅周辺には一種異様な雰囲気が漂っていた。新聞社に向かって歩く左手は高い塀が続き、中はまるで見えなかったが、三菱重工の工場群だった。

神奈川新聞社は、戦前の建物がそのまま残ったような古い鉄筋コンクリートの建物だった。横浜も戦争中に大空襲に遭い、新聞社の周囲には空襲によるものか、赤レンガが焼けたような壁の建物も残っていた。

外注専門印刷部門の責任者は式井さんというやや年配の人だった。式井さんは新聞社で長い勤務歴のあるベテラン社員で、その下に背の高い戸塚さんという人がいた。戸塚さんが実際に私たちの担当者になった。全くの素人の私たちに、何でも教えてくれた戸塚さんは最高の指導者だった。私たちを受け入れて、新聞社ではエライ所を引き受けたものだ、と頭を抱えていたに違いない。

ここでは創刊号の原稿持ち込みについて書く。ことは簡単に運ぶものではない。やっと仕上げた創刊号の割付表と掲載記事を整えることができた。出来上がる前の数日は、徹夜の作業が続きみんな疲れ切っていた。神奈川新聞社に着くなり、外注印刷責任者の式井さんから呼ばれた。「全く駄目だ」と言う。まず、新聞制作の基本である「割付」がなっていない。「見出し」も駄目だ、と言われた。その場で、式井さんの講義が始まった。見出しが段のところで終わる「腹切り」と、見出しが漢字ばかりの「墓場見出し」が多すぎると言うのだ。新聞制作の基本を知らない私たちだったので、みんな素直に式井さんの話を聞くことができた。その後、新聞制作のレクチャーは式井さんの部下の戸塚さんに移った。戸塚さんは、自社の新聞を持ってきて、見本を示しながら指導してくれたものである。

創刊号の作業は早稲田諏訪町の福山の下宿や西武線沿いの簡易ホテルを使って行っ

た。やっとできた、と部員はみんなで喜んだものの、身体は疲れ切っていた。出来上がる前の数日は場所を転々としながら、徹夜の作業が続いていた。松井と自分と山崎の3人で創刊号の原稿と割付表を神奈川新聞に持っていくと言うと、他の3人も一緒に行くと言い出し、結局6人全員で行った。いよいよ、創刊号ができるのだと思うと、感無量だった。

しかし、創刊号の原稿等一式を受け取った戸塚さんは、すぐ上司の式井さんと呼ばれた。式井、戸塚両氏は頭を抱えていた。今後どうなるかと心配していたに違いない。そこから前述の式井講義が始まったのである。式井さんの話には説得力があった。

私たちは教えられた通りに、すぐ実行するので、白紙に絵を書くようなものだったに違いない。自分勝手な思いであるが、両氏は教え甲斐を感じていたのではないだろうか。式井さんと戸塚さんの指導は厳しい中にも温かい気持ちがかもっていた。

恥ずかしいことに、私たちは原稿を書き、割付表を作って印刷所に持ち込めば、そのまま新聞ができると考えていた。「原稿を書くのは当たり前、しっかり割り付けをして、初めて印刷に回せるのだ」と、戸塚さん厳しく言われたことで、私たちの甘い考えは一気に吹き飛んだ。

新聞印刷のことを何も知らなかった私たちは神奈川新聞社でいろいろなことを教えてもらった。特に、新聞の印刷知識、特に「割付」が極めて大事であることを教わった。

そんな中で、私たちも苦慮の末に独自のノウハウを獲得したことがあった。徹底的に印刷知識を叩き込まれた私たちは次第にズルさも覚えた。割付表を出し、組版ができて、まだ修正が出てくる。これは、私たちの原稿の悪さと割り付けの悪さのためである。こんな時、面と向かって戸塚さんに訂正は言い出しにくい。しかし、誤植のある文章のままでは、まともな新聞ではない。すでに、何回も印刷所の中へ入っていた私たちは活字を拾う工員さんとも顔見知りの仲になっていた。そこで、活字の拾い方まで教えてもらっていた。私たちが原稿修正をしたい時には、戸塚さんを通さず、直接工員さんに活字組みの依頼に行った。工員さんも手が空いている時は、すぐに活字を拾ってくれるが、手が離せない時もある。そんな時には工員さんに一声かけ、原稿を書いた本人が活字を拾って小さな組版を作ってしまうのだった。せいぜい手のひらに乗る程度の組版である。それ以上の量の文章はとても素人には手におえない。自分が書いた文章が鉛の活字で組まれて、自分の手の中に納まっていると思うと不思議な感じがしたものだ。この作業は自分だけではなく、「早稲田スポーツ」部員であれば一度は経験した「悪さ」ではなかったか。とにかく、直しが多く自分で作業をしなければならなかったのが実情である。これは別の部屋にいる式井さんや戸塚さんには見えなかったに違いない。今や印刷もコンピュータ管理の時代、活字を拾うことなど、現在の「早稲田スポーツ」の部員には想像外のことであろう。

12 威厳のあった大西鐵之祐秘書課長

「早稲田スポーツ」は、早稲田の学生が作る新聞なので、創刊号には「大浜信泉総長に登場してもらってはどうか」と、編集会議で提案した。言っただけのもの、担当となった自分には大きな不安があった。果たして大浜総長が創刊前の新聞部員に会ってくれるか、ましてや、こちらは入学して間もない1年生だ。そこで、体育館事務所の田古島さんに相談することにした。田古島さんは「秘書室に大西さんと言う秘書課長がいるので、君が直接頼んでみたらどうか、必ず良いアイデアを出してくれる」とアドバイスしてくれた。さらに、大西鐵之祐さんの経歴などを簡潔に話してくれた。大西さんは日本ラグビー界の大物だとは知っていたが、詳しいことは知らなかったもので、大いに助かった。

大学本部は、大隈講堂を背にして西に向かう、大学のメインストリートの右側、ちょうど図書館の向かい側のクラシックな建物に入っていた。建物の大半を政経学部が使っていたが、大学本部も入っていた。正面から恐る恐る入って、2階の秘書室に行った。大西さんは「早稲田スポーツか、うーん」と言ってから、「総長に会いたいのか、スケジュールをチェックして、問題がなければすぐに合わせてやるよ」と言う。こんなに話がスムーズに進むはずはないと、逆に不安になった。大西さんが言った「うーん」も気になった。その中には、いきなり総長面会をやるのか、という思いもあっただろうと思う。大西さんの眼は人を圧倒する力を持っていた。私の不安をよそに、大西さんはすぐにスケジュール調整をしてくれて、確か3日後の appointments が取れた。「総長室はこの奥だ、時間には遅れるな」と念を押した。陰に田古島さんの助言があったことは間違いない。

大西鐵之祐さんとは、この後、長い付き合いをすることになる。「早稲田スポーツ」の初代会長・清原健司教授が、会合の最中に倒れて亡くなった。その後任にお願いしたのが大西さんだったのである。

その後、世の中はラグビーブームになり、かつ大西鐵之祐ブームも盛り上がった。大西鐵之祐はかつての全日本の有名な選手であり、名指導者でもあった。いわゆる大西理論がラグビー界を席卷したのだった。早稲田のラグビーは常勝を義務づけられたチームであったが、低迷するとマスコミはこぞって「早稲田はどうした」といって一斉に批判記事を書いた。そうした時に、担ぎ出されるのが大西鐵之祐さんであった。そして、大西監督はチームを常勝機運に乗せてしまうのだ。それは早稲田だけではなく、全日本チームにとっても同じことだった。ラグビー界の大西神話の誕生でもあった。神話を背負ったまま、大西さんには亡くなるまで長い間、「早稲田スポーツ」の会長を引き受けていただいた。

13 大浜信泉総長に単体会見

大西さんの尽力で、大浜信泉総長に会うことができた。昭和34年の夏の終わり頃

のことである。約束の時間前に大学本部2階の秘書室に行き、大西さんに挨拶すると、「固くならず、上がるなよ」と激励してくれた。総長室はこの奥だ、と言ってくれた数日前の話が頭にあって、落ち着いて部屋に入ることができた。入学式で総長訓示を聞いたのは、わずか3、4ヵ月前のことである。それが今、1対1で話が聞けるのだ、望外の喜びであった。大西さんから「上がるなよ」と言われていたが、心臓がドキドキするまま総長室へ入った。総長に、「これから創刊号を出す「早稲田スポーツ」の1面に総長の“学生スポーツに対する期待と抱負”という記事を掲載したいので、その依頼にうかがった」旨の話をしたら、大浜総長は快く引き受けてくれた。総長は大柄な人で、柔和な感じの人だった。大西さんには運動部特有の豪気さがあり、総長は学者らしく柔和な顔で、静かさの漂う雰囲気があり、好対照の印象を持った。

総長に、「早稲田スポーツ」創刊の目的とこれまでの経緯を説明すると、総長は私たちの新聞のことをすでに知っていると言った。赤松体育局長や大西秘書課長から、説明を受けていたのかもしれない。総長は、「早稲田で学生スポーツ専門の新聞ができるのは誠に結構なことだ。ぜひ頑張っていて欲しい」と言ってくれた。これ以上の激励はなかった。大浜総長の略歴をウィキペディアでみる。

大浜信泉：明治24年(1891)沖縄・石垣島生まれ、沖縄師範に入学するが後に上京し郁文館、早大高等予科を経て早稲田の法学部に入学し、首席で卒業後三井物産に入社するが後に弁護士開業、相前後して早稲田に戻る。助教授としてイギリス、フランス、ドイツに留学。帰国後、法学部教授。手形法・海商法・イギリス法を講義した。戦後は昭和20年(1945)法学部長、昭和29年(1954)第7代総長に就任した。沖縄復帰運動にも大きく関わった。沖縄海洋博会長、日本野球機構コミッショナーを歴任した。昭和51年(1976)に没した。没後勲一等旭日桐花大綬章を受章した。

(ウィキペディア)

こちらの依頼については、自分なりの学生スポーツや早稲田のスポーツについての要望を書いておくので後日、秘書課長から受け取るようにとのことであった。総長の話が割合早く終わったので、思い切って、質問をしてみたいと思った。一瞬の思い付きであった。自分でも驚くような質問を総長に発した。総長自身のスポーツ体験や早稲田のスポーツの現況についての個人的な考えを聞いてみたい、と思ったのである。総長室へ入るまでは全く頭になかったことである。総長は嫌な顔一つ見せずに、語ってくれた。総長は沖縄・石垣島の出身で古くから合気道に興味を持っているという。しかし、学生の多くが興味を持つメインスポーツ、特に野球、サッカー、ラグビーなどにも興味がある。これらのスポーツは、やはり強くなるといけない。そのために選手もコーチも最大限の努力が必要だ、と強調した。総長が合気道のことに触れたが、当時、早稲田には富木謙治(政経学部卒・教育学部教授)という合気道の達人がいて、合気道部を作り部長を務めていた。富木さんは秋田県出身だった。自分も何回か取

材で会ったことがあるが、寡黙で痩身の人だった。日本の合気道界の牽引者だった。

この大浜総長会見の後、総長は何度も「早稲田スポーツ」紙上に登場することになる。早慶6連戦の時は連続して登場した。早慶戦前の特集号の1面に、高村慶應義塾大学塾長と並んで、早慶戦に期待する旨のメッセージが載り、翌月号には観戦結果が載った。大浜総長のたびたびの登場の裏には、大西さんの影の協力があつたのだ。

新聞創刊後、総長との会見について、思いがけない所からクレームがあつた。当時、学内で絶大な勢力を誇っていた「早稲田大学新聞」からである。大学新聞を名乗る人物から電話があつて、総長に取材した者は大学新聞の事務所まで来い、と言う。いやに高飛車な言い方をするな、と嫌な気分になったが、とにかく自分は大隈会館の裏手にあつた大学新聞の事務所に行った。薄暗い感じの部屋に男たちが4、5人たむろしていた。ずいぶん年季を感じる部屋でもあつた。その中の小柄な男が出てきて、「大浜総長に会つたのは君か。総長に単独で会うのはダメだ、学内にもルールというものがある。会いたい場合、こちらにも連絡をしてくれないと困る」と強い口調で言われた。まるで怒られているようだったので、カチンと頭にきたが、「単独インタビューをしたのは新聞創刊前のことで、学内の慣習は知らない」と答えた。秘書室を通じて、正式にアポをとって総長に会つた旨も伝えたが「そんなことを言つてもだめだ。君は我々を出し抜いたんだ。勝手なルール違反をやつてもらつては困る」と、嫌味のある強い言い方だった。しかし、それ以上のことは言わなかつたし、それ以上の行動もなかつたのでそのまま帰つてきた。その後、大学新聞は、イデオロギー闘争や大学との法廷闘争などが続き、昔日の面影は全くなつてしまった。

このクレームをつけてきた大学新聞の人間とは思わぬところで再会した。自分が勤めていた会社のトップが親しくしていたある大手飲料会社の社長と会食をすることになり、企画開発部長だった自分が、老舗ホテルのレストランでの会食に同伴した。会食の席で早稲田の話になり、スポーツの話になつた。次いで、何がきっかけだったか失念したが、学生新聞の話になりこちらにも質問が飛んできた。相手の社長は慶應の出身、早慶と言う気安さもあつてか饒舌だった。そのうち、先方の社長が、自分の会社に早稲田大学新聞をやつていた男がいると言う。社長は、学生時代に似たような仕事をしていたのなら、一度会つてみたらどうか、と勧めてくれた。社長の話を聞いているうち、その男が、かつて自分の総長インタビューにクレームをつけた男ではないか、と確信に近いものを抱いた。

それをきっかけに、件の男Kさんに再会した。会社の広報マンとして活躍中だった。話をしてみると、Kさんは教育・国文の先輩、高校は横浜緑ヶ丘だと言う。何と、松井の2年先輩だった。不思議な縁である。創刊時のクレームの件をKさんが記憶していたか敢えて聞かなかつた。大学新聞に呼ばれたのが自分ではなく、松井が行つていたら、どうなつていたかと想像するだけでも面白かつた。Kさんがクレームを忘れて

いるわけではなく、相手が自分であったことは百も承知であったはず。お互い、大人の対応をしたと言えるだろう。会社勤務時代には、Kさんと自分は互いの会社近くで、会食をしたりお茶を飲んだりする交流が続いた。人の縁とは不思議なモノである。

14 1面下段のコラム「アウトライン」

「早稲田スポーツ」の1面下にコラム欄を設けることについては、誰も異論がなかった。朝・毎・読など全国紙の1面下には1段のコラムがあった。朝日の「天声人語」、読売の「編集手帳」毎日の「余録」は有名であった。私たちも、新聞に1面コラムがあるのは当然と思っていたが、タイトルを何にしようかという点で議論になった。しかし、誰も斬新なタイトル名を提言しなかった。結局、自分が出した「アウトライン」というタイトルが簡単に決まってしまった。「核心」とか「ノーサイド」とかの案も出したが、賛成を得られなかった。地味なコラムには、誰も興味がなかったのか、タイトル発案者の自分が書けということに決まってしまった。自分では「アウトライン」というタイトルを気に入っていたわけではない。もっといいタイトルがあるはずだと思っていたが、代案を出すまでには至らなかった。創刊号が出てしまっただけからは直ちに直せなかった。「アウトライン」はなかなか厄介なコラムだった。簡潔な文章が求められており、文字数も決まっている。大手新聞社のコラムのような文章は逆立ちしても書けない。毎月締め切り直前まで原稿用紙と睨めっこをしていたものだ。草創期には、神奈川新聞の校正室の大きなテーブルで追われるような気持ちで書いたものである。

同じように「題字」の問題があった。創刊以来続く「早稲田スポーツ」の題字は著名人の筆によるものではなく、神奈川新聞社の版下係が制作したものだ。部内では、大浜信泉総長に揮毫してもらった案が出た。総長に題字を依頼すれば、おそらく実現したと思う。しかし、私たちはあまりにも忙しかった。喧々諤々言い合っているうちに時間ばかりが過ぎて、総長に題字の揮毫を依頼する時を失ってしまったのである。その間に、神奈川新聞社では版下係が作った「早稲田スポーツ」の題字案が出来上がっていた。結局、その題字を使わざるを得なかった。

後から考えるに、大浜総長の会見が実現した時に、依頼すればよかったのに、と悔しい思いをした。

新聞発刊を決めてから時間の経過はものすごく速かった。編集のための部屋がなかったことが私たちにとっての一番の問題だった。特に創刊前の慌ただしい時期に部屋がないことでどれほど困ったかは計り知れない。大学としてもいきなり部屋を何とかしてくれと言われても迷惑な話だったのではないか。正式に「学生の会」として認められていないこと、新聞そのものが出来上がっていないことが最大のネックだった。私たちはあちこち転々とするほかはなかった。仮部室として使わせてもらっていた体育館事務所の一角は、日中使えても夜は閉鎖された。さらに、福山の諏訪町の下宿も

いつまでも使えない。簡易ホテルといえども金がかかる、などの問題があつて、最後は松井の実家に頼むしかなかった。転がり込むような形で横浜山手の松井家に行った。しかし、横浜の山手は幾らか山の上、私たち横浜以外に住む者にとってはかなり遠い場所だった。ただ、神奈川新聞社までが近いことは便利だった。

先述したように、印刷が神奈川新聞に決まった最大の理由は松井の母親・澄子さんにあった。松井家は、子供が多かったため、澄子さんは、いろいろな仕事をしていた。その一つに企業の従業員を相手にした物品販売があつた。神奈川新聞社は取引先の一つであつた。外注印刷専門セクションの人たちとも顔見知りだった。当然、式井さんとも接点があつて、息子が熱心に取り組んでいる「早稲田スポーツ」の印刷について相談したようだ。

私たちには、新聞印刷のできる会社に伝手がなかったため、この母親の先行とも思える行動は良かった。難点は、大学から遠いことだった。もっとも、自分を除いたほかの5人は神奈川と東京だったので、自分が我慢すれば良いことだった。澄子さんは私たちが校正で悪戦苦闘している時なども、時折顔を出していた。式井さんとの話も和やかで、昨日今日知り合ったようではなかった。松井の母親は「早稲田スポーツ」発刊の最大の理解者であり、功労者であつたと言えよう。親としては息子が言い出した「早稲田スポーツ」の成功を望まないわけではなく、新聞社への働きかけを積極的に行ってくれたのであつた。後に起こる印刷費の支払い延期などのトラブルにもいろいろな形で支援してくれた。創刊直前の数日間、松井宅で夜遅くまで議論をしたり、原稿を書いたりできたのも、みんな母親の理解があつたからである。夜半になると決まって握り飯が出た。都内や私など千葉県に住む人間はほとんど家に帰れなかった。ある意味、松井の母親と私たちとは一緒に新聞発行の準備に入っていたように思う。創刊号を出してから、彼の家には何度も通い、部屋を借りて食事をご馳走になったものだ。松井家は「早稲田スポーツ」の隠れ家であつたとも言える。

15 再び、松井盈について

松井のことは、再三書いてきたが書き足りない。すでに書いた通り、創刊号に部員として名を連ねたのは、松井盈、西川昌衛、山崎茂、原田貞雄、福山龍介、本多統の6人である。しかし、社会人になってからも、付き合いっていたのは、松井だけであつた。

教育学部国語国文学科には、A・B・Cの3クラスがあつた。一クラスは50人ほどで構成され、五十音順に振分けられていた。A組は名字が「あ行」から始まる学生、私たち6人は3番目のC組で、名字が「に行」から始まっているクラスであつた。自分の前は西片という女性、後ろは後に京橋の老舗骨董店の婿に収まり、中国骨董の権威として何冊もの著作を著した西村康彦だった。大学1年時は、語学の授業がクラスごとに行われていたので、年中顔を合わせていたが、A組やB組の人たちとの交流は

なかった。第二外国語の授業では各クラス混在になっていたものの、英語に比べフランス語などは授業数が少なく、クラスの間とも馴染まないうちに学期が終る。従って、いつも顔を合わせる英語の授業だけが友人を作る場だった。男女関係も一緒に、卒論が同じだった友人は「1年のうちからクラスで彼女ができた」と言っていた。そうした柔かい話は「早稲田スポーツ」を始めた私には無縁だった。第授業が終わると、いち早くクラスを抜け出し、新聞作成の仲間との打ち合わせだったから、クラスの半分近くいた女子学生との会話はほとんどなかった。

ここから話が少し横道へ逸れる。

松井に誘われる前は、国文学科に入ったのだから、文学関係のサークルに入って文学の勉強をしようと考えていた。小説の類は中学時代からかなり読んでいた。特に、晩年、軽井沢追分に住んでいた堀辰雄の文章が良かった。繊細な感じの文章と堀の生活がマッチしていた感じがした。中学3年の時に堀辰雄が死んだ。堀辰雄の死も何となく記憶に残った。深く読んだわけではないが漱石や芥川、志賀直哉などもかなり読んだ。ある意味、軟弱な生徒だった。

工業高校に入ってから1年間は電車通学。往復の電車で、文庫本を毎日1冊読もうと決めた。こうした背景があって、大学入学当初、「近代文学会」に入部した。サークルでは先輩を含めて数人の人たちとの交流ができた。教育・国文の新生の何人かも参加した。かなり頻繁に行われる部会での話も面白く、良いサークルに入っていた。

近代文学会に入部したお蔭で、入学後初めて、同じクラスの女子学生と開館したばかりの上野の国立西洋美術館へ行くことになった。ちょうど、美術館オープン記念に旧松方コレクションを中心にした美術展が開かれていたのである。印象派の名画を集めたコレクションは大人気で連日大変な賑わいであると新聞が報じていた。なぜ、C組の女子学生と一緒に美術展に行ったかといえば、それは偶然である。ある日、「近代文学会」の会合が終わって、たまたまキャンパスを一緒に歩くことになった。彼女は松方コレクションに興味を持っていて、美術にも詳しくあった。彼女は日本海側の県から上京したばかりで、上野に行きたいが、東京は不案内であると言う。上野なら自分が案内できると自信たっぷりに言ったところ、彼女から「連れて行ってください」と言われ、西洋美術館行きが実現したのである。自分は松方コレクションの何たるかも正確には知らなかった。自分は会津八一に興味を持って早稲田を目指したこともあり、西洋よりも東洋の分野が好きであった。偶然とはいえ、こんなに早い時期にクラスの女子学生と美術展に行くことになるのは、想定外で、正直、びっくり仰天の出来事だった。この時の記憶は今も頭にはっきりと残っている。

自分が通った二つの高校には女子学生はいなかった。但し、これは間違いで最初に通った東工大附属工高は原則共学で女子学生がほんの一握り通っていた。自分が入った工業化学科にも女子が一人いた。1年間しか在学していなかったもので、その人とも

話をしたことはなかった。二年生に編入した獨協高校は男子校である。ところが、早稲田に入ると案外女子学生が多く、入学早々のある時期、学校に行っては周囲をキョロキョロするばかりだった。こんなに早く女子学生と一緒に美術館に行くことになるとは思ってもいなかった。

松方コレクションを見てから二人は広小路に出て喫茶店に入った。主に個人的なことを中心に話をした。話ばかりしてお茶は1杯飲んだだけである。夏休みの前に、彼女から、遊びがてら山陰に来ませんか、との誘いを受けた。気分的には高ぶったが、ちょうど「早稲田スポーツ」の創刊に向けて資金稼ぎに懸命の時で断念せざるを得なかった。その後の学生時代のほぼ4年間は「早稲田スポーツ」の仕事に明け暮れていたために西洋美術館に行った彼女とは、食事の機会も絵を見る機会もなかった。「早稲田スポーツ」に加わることになって自分は近代文学のサークルを退会した。

後年、教育学部の「近代文学会」のことをしばしば思い出した。みんな勉強家で文学が好き、単にサークルの会合とは思えない徹底した議論を闘わしていたのである。「近代文学会」を離れて何年経っても、先輩たちの真剣な顔が頭に浮かんできた。その中に、山崎一穎さんという学者になった人がいた。後に、森鷗外の研究者として一家を成し、跡見女子大学の教授、学長、理事長を務め、さらに文京区の鷗外記念館館長にも就任している。自分のゼミの恩師、紅野敏郎さんが平成20年(2008)に開いた「生前葬」(三途の川への前夜祭)の時、山崎さんと約半世紀ぶりで会った。山崎さんは「君は近代文学会を途中でやめて行ったな、それにしても早稲田スポーツは成功しているね」と話しかけてきた。山崎さんが「早稲田スポーツ」のことを覚えているということに驚いた。

話を松井のことに戻す。

スポーツ新聞を発刊したいという松井は、なかなか面白いことを言う男だと思いつつ「参加する」と返事をするには躊躇した。資金、経験などかなり多くの点で疑念が考えられたからである。しかし、若いうちのリスクは恐れるな、という言葉を決意の本で読んだこともあり、数日を経ずして参加する決意を固め、松井に返事をした。松井はエネルギーの塊のような男でかなり積極性の強い男だった。一度、決めたことは後へは引かない、梃子でも動かない強情な男であった。こうした性格を自分は万に一つも持ち合わせていない。この強い性格が「早稲田スポーツ」誕生の原動力になった。先に紹介したように、後輩たちから「ナポレ松井」と言われることもあった。

結果として、大学を出てから長い付き合いが続いたのは創刊メンバーの中では松井だけで、他の男たちとの付き合いは時の流れが変わったように途絶えてしまった。

16 初期広告の大半は高田馬場駅から大学までの商店

「早稲田スポーツ」の運営は松井と自分に、時々山崎が加わっていた。しかし、この

3人で「早稲田スポーツ」の運営ができるわけではない。編集会議は全員で議論をし、広告取りもみんなが全力を挙げてゆこうと、確認しながら仕事を進めた。創刊間もない頃は、広告収入が新聞運営の全てであると誰もが認識していたので、少しでも暇ができると、広告取りを行った。大学の周りの商店会はもちろん、高田馬場から大学までの大通りの両側は部員みんなで手分けをして何回も歩いた。ほとんどの店からは「また君たちか」と嫌味を言われる始末であった。さらに大学の体育局からは各運動部の先輩が勤めている大会社を紹介してもらうなどの努力を積み重ねた。大学周辺の商店回りにしろ、先輩の勤めている大会社を回るにしても、全ては足による活動が基本だった。新しい新聞を立ち上げるためには、何と言っても足力が重要だったと言っても過言ではなかった。

早稲田には学生サークルが数えきれないほどあり、どの部も資金稼ぎのため大学の周辺の商店を回っていた。学生の訪問に慣れていた店の主人は、こちらが用件を持ち出す前に「もう結構だよ」と言って、取り付く島もないのである。商店にしてみれば、学生のサークルに何回も広告費を出す余裕はなかったのかもしれない。そうした中で、「早稲田スポーツ」が数件でも広告をもらってきたのは貴重な成果だった。

早稲田には、「早稲田大学新聞」を筆頭に、「早稲田ガーディアン」など数紙あり、それぞれが大学周辺の商店を広告収入のターゲットにしていた。「早稲田スポーツ」は全くの駆け出し新聞、というより見本紙も持たないで広告取りをやったのだから、いくら無知な1年生でとはいえ、とんでもないことだった。

17 編集長・松井盈の一貫した考え「各部平等に」

松井が構想した「早稲田スポーツ」は約半年の準備期間を経て、やっと創刊に漕ぎつけることが出来た。教育・国文のC組で賛同者を集め、大学との交渉、資金調達（広告取りが主）、学内各所への届け、各所への挨拶など初体験のことをこなしながら、新聞の発刊に向けて動いた結果、「早稲田スポーツ」の創刊が実現できたのだ。

準備期間中の松井の奮闘ぶりは言葉では表現し難いほど活力に溢れていた。持論を徹底的に説明して、相手の反撃にも屈しなかった。彼に面と向かって反論するのはかなりの難問だった。自らの意見を通そうとする者にはかなり厄介な人物でもあった。初期の頃には、この強い性格に反旗を翻して、部から去っていった者が何人かいた。しかし、一人の意見に従うだけでは参加している意味がなく、堂々と議論を闘わすのが「学生の会」の基本であると思った。時折、発生した松井との衝突は当然であると、自分は割り切って考えていた。しかし、自分には彼ほどの理論もなく、徹底抗戦する意欲もなく、正面からぶつかることは極力避けた、というのが本音である。松井のぶれない強い性格こそ、後に、「ナポレ松井」と後輩から称される所以でもあった。実際、松井は「俺はあまり不可能という言葉は好きではない」と口にすることがあった。この精神があったからこそ「早稲田スポーツ」の誕生があったと言える。

松井のタフガイぶりを示すことがほかにもあった。「早稲田スポーツ」が早慶6連戦を経て財政的にも安定してきた頃、彼はある論文を書いて、賞をもらった。部員の誰も知らないことであった。確か、毎日新聞社がアメリカのケネディ大統領の就任演説(1961年1月)の感想論文募集を学生対象に行った。松井は多くを語らなかったが、賞の結果を発表する新聞を持ってきて見せてくれた。毎日新聞は賞の結果をページの隅に報道していた。私たち部員は新聞の記事は読んだが、論文そのものは読んだことがなかった。まさに「忙中忙あり」の中で、よく入選するような論文を書いたものだ。ここにも「ナポレオン松井」の面目躍如たる姿があった。論文を読みたいと本人に言ったものの、業務の多忙さもあって、論文のことは忘れてしまい、読む機会を失った。

彼のぐいぐいと他の部員を引っ張る行動力には目を見張った。例えば、広告取りなどに弱気を吐こうものなら、「それじゃ俺が行って取ってくる」と一喝した。そうまで言われては他の部員も立場がない。自ら多くの広告主を回って、広告をとってくるほかはなかった。もちろん、最初の同志である自分に対しても松井は同じこと言った。当然である。いくら二人が「早稲田スポーツ」の準備を一緒に始めたとはいえ、差別をしたのでは他の部員に示しがつかない。強烈なリーダーシップを彼は持っていたのである。この強い理想と行動力があったからこそ初期の「早稲田スポーツ」の体制が崩れず前進できた根源があったと思う。

ただ1件、松井と自分の間に決定的な考え方の違いがあった。野球に対する見解の相違だった。すでに述べたが、「早稲田スポーツ」の基本方針は松井が強く主張した「各部を平等に扱う」ことであった。

基本的には自分も同感で、新聞スタート時点では異論を挟まなかった。しかし、発行回数が増え、学内で認知され出すと、学生たちがどのような記事を望んでいるのかが分かってきた。「なぜ野球の記事を多く書かないのか」、「早稲田の学生は野球部の現状を知りたがっている」と言う意見が多かった。同時に、学生が求めている記事を書かないと、新聞が売れなくなるのではないかと心配になってきたのである。

当時、六大学野球はあらゆる学生スポーツの中でも最も人気があり、観客動員も圧倒的に多かった。特に春秋の早慶戦は学生野球の花形で、常に5万人か6万人もの大観衆が神宮球場に押しかけていた。戦後、アマチュアスポーツでは、水泳の古橋広之進と橋爪四郎の大活躍が日本人に勇気と生きる力を与えてくれた。次に日本人にスポーツの素晴らしさを教えてくれたのが東京六大学野球だったのだ。もちろん、学生野球は戦前から花形スポーツで、早慶戦は華だった。ところが、戦争がスポーツにも大打撃を与え、プロも学生野球も敵性スポーツとして中断の憂き目をみた。しかし、戦争が終わると、学生野球はプロに先駆けて復興した。戦争から生きて帰ってきた選手たちも大学に戻り、リーグ戦に参加した。戦争での中断を経て、学生野球人気は徐々に盛り返してきた。野球好きの人は早稲田の福島一雄、末吉俊信両投手(ともに旧制小倉中)の活躍に心を躍らせていた。その後、早稲田には石井藤吉郎(水戸商)、蔭山和夫(旧市岡中)、小森光生

(松本市立高)、広岡達郎(呉三津田高)、石井連蔵(水戸一高)などの実力あるスター選手が続々と入学し、神宮球場を湧かせたのである。続いて、立教には長嶋茂雄(佐倉一高)、杉浦忠(挙母高)、本屋敷錦吾(芦屋高)らが入学し、立教の黄金期を迎えたばかりか、六大学野球が絶頂期を迎えた。

「早稲田スポーツ」の誕生は、そうした、六大学野球に大衆の熱意が残っている時代だったのである。

自分と松井との関係は、編集長と主務の関係で、いわば上司と部下である。この関係は十分に理解し、編集長の編集方針には当然従っていた。松井が言う、「各部平等に」との精神も堅持していた。最初から自分の意見を強く言えば、他の部員から「あの二人はどうなっているんだ、やっていられないよ」と離反されるのは火を見るより明らかだった。しかし、頭の中は、これからの「早稲田スポーツ」を紙面的にも経営面からも強くするには、一般学生に支持されなければならないと思っていた。そのためには野球の記事を多く書く必要があると信じて疑わなかった。「各部平等」だけでは生き残れないし、財務基盤の確立もできない。財務の安定こそ喫緊の課題であり、大学の機関紙ではない新聞の肝であると思っていた。自分は創刊以来、主務だったが、主務は「早稲田スポーツ」を早く利益を生み出す体質に変えて行くことにあると信じていた。

18 昭和34年11月17日、ついに「早稲田スポーツ」創刊

「早稲田スポーツ」は昭和34年(1959)11月17日に創刊号を発行して第一歩を踏み出した。早稲田大学にとっても、スポーツ専門の新聞が学生の手によって創刊されたのは学校創立以来のことである。早稲田には、「早稲田文学」や「早稲田大学学生新聞」などわが国の文学界、マスコミに界に多くの影響を及ぼし、多くの逸材を輩出するマスコミ関連の会が存在していた。しかし、スポーツ専門の学生新聞が出現したことには大きな衝撃だった、と後に言われたことがある。新聞創刊の前に、大浜信泉第7代総長に会い、学生スポーツに対する見解を聞いたことはすでに書いた。大浜総長は「私学とスポーツ」とのタイトルで創刊号へ文章を寄せた。総長の立場からスポーツの重要性を説き、かつ、学生が主体的に創刊を果した「早稲田スポーツ」への大きな期待を示した。さらに、総長は大学のあらゆるスポーツにも強く興味を持っているとも語った。

紙面の一見華々しい文字とは裏腹に、資金的な不安に襲われ、私たちは大きな壁に直面していた。ただこの壁を突破しなければならないとの意気込みだけは強かった。同時に、早稲田で最初のスポーツ専門の新聞を立ち上げるという目的の大きさが常に私たちに勇気を充ててくれたのも事実であった。かつ、部員全員が怖さ知らずの若さを持っていたことも不安を吹き飛ばす大きな要因だった。

また、なぜ、「早稲田スポーツ」の創刊号が早慶戦前の10月ではなく11月になったのかという疑問の声を聞く。すでに述べたことだが、繰り返す。入学早々の創刊構

想で部員集めが大変だったこと、新聞創刊のための資金集めが大変だったこと、新聞知識の習得、大学との折衝などの難問解決に時間がかかり過ぎたことが創刊号の遅れになった。早慶戦の前に創刊する余裕はとてなかつた、というのが実情である。創刊に花を添えるには、早慶戦の神宮球場で販売をスタートさせることができれば良かったと誰もが思っていた。

最大の難問が資金問題であった。もし、十分な時間と資金的余裕があったら、用意周到に発行計画を立て、早慶戦に合せた販売計画ができたに違いない。実際は、そうした計画は夢のまた夢で、私たちは金策に追われていたのである。また、部員全員が新聞発行に関する知識ゼロ、資金ゼロの状態からのスタートでは 11 月発行がやっとであった。

創刊号が出来上がった、昭和 34 年 (1959) 11 月 17 日の天気は良かった。当日は、朝早くから部員全員 6 人が神奈川新聞社に集合した。刷り上ったばかりの新聞を前に全員が感慨無量に浸ったのはいうまでもない。新聞の大きさはブランケット版の 1 色刷り、4 ページだった。今から考えれば、寂しいばかりの新聞であった。1 面に早慶戦の勝利を伝える記事で華々しく埋めたつもりだったが、いかんせん素人の作った新聞は迫力が乏しかった。その数年後、カラー印刷になる「早稲田スポーツ」は全く想像外であった。神奈川新聞社で式井、戸塚両氏から受け取った創刊号は、強烈なインクの匂いだった。その匂いも心地よい香りとなってきた記憶が残っている。自分たちには新聞を神奈川新聞社から早稲田まで運ぶ手段を持たなかつた。みんなで手分けして電車に乗って大学まで持ち帰るほかはなかつた。創刊号 3000 部の新聞は、500 部ずつ 6 つの束になって梱包されていた。6 人でそれを担いで桜木町駅まで行き、電車に乗って高田馬場まで帰ってきた。新聞と分かる大きな梱包物を肩に担いで、神奈川新聞社から桜木町駅までの道を学生が 1 列になって歩いている光景も異様だったに違いない。京浜東北線の車内でも乗客からはジロジロと見られた。それでも、品川駅乗換え高田馬場駅までの約 1 時間は全く苦にならず、むしろ鼻歌交じりになるほどで幸せな新聞運びだったと記憶している。

大学に到着し、まず体育館事務所に新聞を降ろした。仮事務所として使わせてもらっていた体育館事務所の一角しか新聞を置く所はなかつた。「早稲田スポーツ」は、その後しばらく体育館事務所を仮の部室にするよりなかつた。出来上がったばかりの新聞を事務所の村田光敏主事、田古島浩、五十嵐一幸、センちゃん（この人のことはいつまでも愛称で言っていた）の各所員に渡した。みな喜んでくれ、「良く頑張った」と言ってくれた。その足で記念会堂先の体育局に行き、新しい新聞を局長以下幹部の方々への配布を事務の人に頼んだ。創刊した「早稲田スポーツ」がブランケット版だったことに対し、学内には驚きの声が上がったという。体育館事務所の村田さんも「いきなりこんな大きな新聞にしたのか」と驚いたように言ったことを覚えている。大方の人がタブロイド判の新聞を想像していたのだろう。

「早稲田スポーツ」を学内で販売するには、学生部の許可を得なければならない。当時の学生部長は滝口宏教授（教育学部・考古学）だった。すでに松井と二人で滝口教授には何回となく会っていて、新しい新聞の説明をし、学内販売の内諾も得ていた。滝口さんは応援部とフェンシング部の部長を務めるほどスポーツに関心が強かった。「早稲田スポーツ」に対しても、早くから興味と期待を示してくれ、会うたびに激励の言葉をいただいた。余談を一つ。それまで全く知らなかったが、滝口さんの長女が自分たちと同じ教育学部国文科に在籍していた。前の組のBクラスに在籍していたのだった。しかし、部員の誰も娘さんの滝口さんとは話をしたことがなかった。もしかしたら、私たちの行動は娘さんから父親に伝わっていた可能性がある。「早稲田スポーツ」のことは国文科の中ではかなりの噂になっていたからである。

その頃、60年安保で学生運動は各大学で激しく動いていた。早稲田でも他の大学同様、学内が騒然となっていた。学生部長も学内の各セクトの動きに超過敏で、気の休まる暇がない様子でもあった。左翼学生に振り回される中、「早稲田スポーツ」は滝口さんにとって唯一の安らぎの時間ではなかったのだろうか。なお、滝口さんとの折衝は山崎が中心になって当たった。大学構内に出す販売用の机や椅子の借用も了承された。構内には革マルなどと書かれた派手でどぎつい文字で書かれた学生運動の立て看板が林立していた頃である。

新聞の搬入翌日から、大学正面のメインストリートの一角に大学の許可を得て机を出して「早稲田スポーツ」の販売を始めた。私たちはまず、メインストリートの右側の2号館横に机を置き、刷り上がったばかりの新聞を並べた。1部10円である。机の脇にタテ看を立てて、「早稲田スポーツ」創刊！大学のスポーツなら何でも載っている、との謳い文句を下手な字で書いた紙を貼った。回りに林立する全学連など学生運動の独特の立看板に完全に圧倒されていた。文字の大きさが違う、訴える言葉の迫力が違う、独特の調子でアジる学生の声の大きさも桁違いだった。

19 安井俊雄教授(新聞学)から突然の呼び出し

創刊号を出してホッとする間もなく、突然、新聞学の安井俊雄教授から呼び出しがあった。教育学部の事務所前の掲示板に、「早稲田スポーツ」の責任者は安井教授の研究室へ来るようにという貼り紙があった。松井も自分も当時、安井教授の授業を取っていなかったし、安井教授の名前すら知らなかった。一体、何ごとなのかと二人で顔を合わせたことを覚えている。これは呼び出し状に違いないと不安になったが、松井と二人で指定の日時に学部の事務所に出向いた。入学当初に授業の登録で事務所に入って以来、あまり事務所の中には用がなかった。学生に対する要件は全て事務所前の掲示板に出されることが常であった。事前に安井教授を調べると、専門は新聞学で教育学部では新聞学の授業を持っていた。さらに、大学に来る前は朝日新聞で上層部にいた人だということも分かった。

教育学部の事務員に、安井教授からの呼び出しの件で来たことを伝えると、「教授がお部屋で待っています」というではないか。呼び出し状には確かに「研究室まで来い」とあった。わざわざ私たちを部屋で待っているとは、ただならぬ雰囲気を感じた。教授室を確認して二人は階段を登って教授の部屋に行った。案外小さな部屋で、安井教授は奥の窓際に机を置いて座っていた。丸顔でやや小太りの人で、しかめ面をしていた。「早稲田スポーツ新聞」の部員ですと名乗ると、笑顔も見せずに真っ直ぐに私たちを見た。

「君たちは新聞の経験があるのか」と聞かれたので、二人とも全くないと答えた。「君たちの新聞を見たが、全くなっとらん」と、ご機嫌斜めの様子であった。「あんなものを出されては困る。あれでは早稲田の恥だ、少しは新聞の勉強したまえ」と声を少し荒げ、説教された。この後、新聞創刊の経緯や新聞について持っている知識を言って、安井教授に反論したつもりであったが、全く取り付く島がない。逆に、安井節を1時間ばかり聞くことになった。途中、この先生は私たちを呼びつけて、熱心に自説を説いていることがわかった。なるほど、新聞を作る前に、新聞学の教授のところに顔を出して、お伺いを立てていけば、もっと質の高い新聞ができたかもしれない、という気持ちになった。

延々と話すうち、安井教授の言葉が柔らかくなってきて、「どうだ今度、夜にでもわが家に来ないか。新聞とは何かを徹底的に教えてやる」と言った。意外な言葉だった。大学内に新聞学の大家がいて、しかも直々教えてくれるというのだ。創刊前に「明大スポーツ」の鈴木編集長からレクチャーをうけたものの、新聞の専門家から見たら全くなっていない新聞だったのである。しかも、教授の方から家で教えてやると言い出したのである。安井さんは家庭教師を買って出たのだ。二人は素直に「よろしく願います」と言って安井教授の部屋を出た。教授の最初と最後の話しぶりはすっかり変わっていた。ご機嫌になっていたのだ。自ら紙に鉛筆で自宅の住所と略図を書いて「明日から1週間ほどやるか。しかし、君たちの都合もあるだろうから、後で都合のいい日を連絡してくれ、最低でも1週間、あるいは10日は必要だ」と言った。

翌週から新聞の活動や授業の都合を見計らって、夜に松井と二人揃って吉祥寺の安井家を訪問することにした。中央線の吉祥寺駅北口を出て真っ直ぐ北に向かい甲州街道を渡る。さらに小さな路地を入った所に安井さんの家はあった。こぢんまりとした、和洋折衷の家だった。大学教授の家だけあって、家の中に入ると部屋は本で埋まっていた。意外だったのは、郷土玩具が多く棚の上に並べてあることだった。自分も郷土玩具（特に各地のこけし、人形、面など）に興味を持っていて、余裕ができれば各地を旅して集めたいと思っていたので、一気に安井さんの部屋の雰囲気が気に入ってしまった。

最初の晩、安井さんの家に着いたのは7時を過ぎていた。和室に通されて、安井さんと向かい合わせになって座卓を囲んだ。こちら二人は大学に入って半年余の新入生。

緊張するなどと言っても無理な話で、安井さんが話している間、正座でかしこまっていた。安井さんの話は堅い話ではなく新入生にも分るように噛み砕いたものであった。突然、話が横道にそれるなど、端々に安井節が炸裂することがあった。ちょうど、1時間ぐらい経った頃「オーイ」と安井さんは奥に向かって叫んだ。たちまち、奥さんが運んできた料理が卓上に並べられた。先ず酒だ。安井さんは酒が好きらしい。こちら二人はあまり酒が飲めない方だった。ここでまたお説教だった。「酒ぐらい飲めなくてどうする。これから社会に出たら世の中は酒ばかりだぞ」と一転して「社会学」になった。私たちは安井さんの話を緊張して聞いていたため、酒が入ると一気に気持ちが楽になった。お爛酒を二人ともいつも以上に飲んだのは当然であった。

厳しい新聞の話と世の中の社会学の話をミックスした夜の安井教室は、そのあと1週間以上は続いた。安井さん個人の経歴も聞いた。大学を卒業してから直ぐ朝日新聞に入社し、編集記者としていろいろな部門を回った由、その後、大学に戻って学生生活に入ったという。朝日時代、占領下の朝鮮（韓国）では出向先の新聞社の幹部だったらしい。朝日新聞には早稲田の先輩諸氏が多く、さまざまな点で薫陶を受けたとも言った。特に戦後、総理目前で亡くなった緒方竹虎氏のような大物がいたという話には興味津々だった。

私たちは、毎晩、大学から吉祥寺の安井学校に通った。いつも酒と食事つきの贅沢な講義だった。この連続講義こそ、その後の「早稲田スポーツ」の発展・充実にどれほど役立ったかは計り知れない。安井さん自身、スポーツが大好きで、「早稲田のスポーツは強くなければいけない」と正直な気持ちを吐露した。この時、分かったのは、安井さんが「早稲田スポーツ」の誕生を喜んでいたということである。そうでなければ、毎夜毎夜、入学したばかりの学生を家に呼んで、食事をさせて新聞の講義をする人はいないだろう。

その頃、安井さんは水泳部長をしていたが、間もなく、安井さんは赤松氏の後を継いで体育局長に就任した。そのことも「早稲田スポーツ」にとってはメリットが多かった。安井教室を経て、安井さんとかなり親しくなっていたので、早稲田のスポーツ情報が聞けたことである。4年生になったばかりの頃、再び安井さんから呼ばれた。1年生の時のことを思い出したが、今度の顔は笑っていた。「君たちは新聞発行の実務を下級生に渡したそうだな、暇で困るだろうから仕事をやる」と突然言った。その仕事が早稲田の運動部誕生60年を記念する出版だった。「輝く早稲田スポーツ 60年のグラフィック」とのタイトルの記念誌だった。このことは後述する。

こんなこともあった。「早稲田スポーツ」の最高の理解者になった安井さんは体育局長として大学の体育・スポーツ行政の責任者になったが、教育学部では相変わらず「新聞学」の授業を持っていた。2年生になった頃、安井さんと会う機会が増えた。何かあると教育学部の安井研究室に顔を出し、相談事に乗ってもらっていた。「君たちにはわしが自宅で特別講義をしているんだ、必ずわしの授業を取れよ」と言っていた。言

われるまでもなく、私たちは、安井新聞学は必須科目として取ったものだ。しかし、「早稲田スポーツ」の業務が多忙であり安井さんの授業には出られなかった。体育局か教育学部の研究室に安井さんを訪ねて授業に出られない実情を詫びたりした。「いいんだ、君たちにはもう十分に新聞学の講義をしてある」と言って逆に慰められた。松井も自分も安井さんから、通知表で優の評価を得たことには苦笑いするほかはなかった。卒業後も大学の催しや水泳の試合などでも会って、かなり長い付き合いが続いた。

20 「早稲田スポーツ」へ続々入部した先輩、同輩、後輩

—先輩部員、葦澤・伊藤・高島さんの活躍—

話が前後するが、「早稲田スポーツ」創刊の頃のほかのメンバーを振り返りたい。

「早稲田スポーツ」を創刊して半年が経つと私たちは2年生になった。「明大スポーツ」の鈴木編集長や新聞学の安井俊雄教授には創刊前後に好指導をいただき、私たちは新聞制作にも慣れてきた。そうすると、6人の部員では継続して発行できるか、疑問が出てきた。4月になり、正規に部員募集を開始した。

ところが、4月を待たずに私たちよりも学年が上の人たちが入部してきた。昭和35年1月だったか2月だったか、突然、どう見ても先輩としか見えない人が体育館事務所にやって来た。しかも、日を置かず2人も来たのである。葦澤元康（政経・室蘭栄高）さんと高島寿郎（商・上野高）さんであった。「自分たちは3年、4月になれば4年生になる。しかし、この新聞を見てどうしても参加したくなかった。仕事は何でもやる」と強く入部を希望した。

松井と山崎の3人で彼らの話を聞いた、新入部員といっても先輩だ。「1年生の私たちの指示に従って働けるのかな」と率直に聞いてみた。二人とも真剣で「必ず役立つ仕事をするので入部したい」とかなり強い意志だった。私たちはその真剣さに打たれて、入部してもらうことにした。先輩が一举に二人、入部したのである。

葦澤さんと高島さんの後に、もう一人、先輩が入部した。伊藤昌俊（教育・浪商高）さんである。3人とも2年先輩で、年も2年かそれ以上の年長者だった。特に葦澤さんは新聞制作に熱意を持っていて、編集会議での発言も的を射ていた。従って、後輩の私たちが教えられることが多かった。葦澤さんは小柄で小太り、室蘭の高校では相撲をやっていたとかで、一時、相撲部に入ったと言っていた。葦澤さんの仕事で忘れられないのが最初の早慶戦特集号での奮闘である。早慶戦の特集号発行については松井と自分とでかなり揉めたこともあり、最初の号はかなり地味な特集号だった。否、地味な新聞しかできなかったと言った方がよい。その中で、葦澤さんは健筆を振るい2面全部使って「物語 早慶戦物語」を書いた。伊藤さんも1面の「ここに早慶激突せり」というやや時代がかったタイトルの下に両校の主将（早稲田・徳武定之・早実高、慶応・渡海昇二・芦屋高）が握手しているトップ写真を撮った。いきなり入部して来た先輩部員の活躍が

光った特集号だった。創刊した当初の「早稲田スポーツ」が全員教育学部国文科の学生ばかりだったことを思うと、いろいろな学部の学生が入部してきたことは嬉しかった。

菫澤さんは取材活動も熱心にやった人で、私たちはその熱意に感服しきりだった。北海道出身だけに色白だった。横浜馬車道の神奈川新聞にも一緒に出かけて、校正作業も一緒に行った。その頃は分からなかったが、先輩部員たちは入部してみて、1年生ばかりで作る「早稲田スポーツ」に一抹の不安も感じていたのではないだろうか。しかし、菫澤さんは何も言わずに、黙々と仕事をこなしていた。「自分は苦学生だ」が彼の口癖だった。新聞社で校正を終えて帰る時は、いつもみんなで桜木町駅前の中華料理屋で軽く飯を食べることが習慣になっていた。みんな金には苦勞していたので、ラーメンかチャーハンの一品を食べるのがせいぜいだった。菫澤さんは早めに食事を終えると、一人で足早に桜木町の町の中に消えていった。

高島さんは、独特な考えを持っていた。新聞会に入ったのに、記事は書かない、広告取りに専念すると、最初から言った。記事を書くのはご免だが、一生懸命に広告取りをするという。こんな人は珍しかった。記事は書くけど、広告取りは御免こうむりたい、というのがみんなの本音だったからである。高島さんは毎日、体育館の事務所には顔は出すものの、「これから広告取りに行ってくる」と言って、すぐに出て行くのが常だった。

伊藤さんは京都の人だった。関西訛りが強く、時には言っていることが分からないこともあった。彼も個性豊かな人で、高島さん同様「記事はあまり書きたくない」と言って、写真専門部員になった。「早稲田スポーツ」には写真の得意な部員がいなかったために伊藤さんの申し出はありがたかった。いきなり、早慶戦特集号の1面の写真を担当してもらった。伊藤さんは、早慶両校のキャップテンを撮り、二人が並んだ格好の1枚の写真に合成し、迫力あるページを作った。伊藤さんは「早稲田スポーツ」に来る前は、写真部に在籍していたほどの腕利きで、素晴らしいスポーツ写真を多く撮った。それでも、「スポーツ写真は動きが早くて難しい」、というのが彼の口癖だった。伊藤さんが持つカメラはかなり良いもので、自分などはとても買える代物ではなかった。

こうした先輩の入部が続いていた時、何人かが、体育館事務所に「入部したい」とやってきた。当然、同級生の入部希望もあった。最初に来たのは、文学部の安武良一(福岡高)と浅野展行(修道高)の二人だった。二人が相談をして一緒に来たのか、偶然、入部申込みが一緒になったのかは分からない。しかし、同じ1年生というのが、何をやるにも好都合だと思い、即座に入部を決めた。この二人と前後して入部してきたのが下本地実(鹿児島・甲南高)と津本信博(奈良・桜井高)、共に教育学部の学生である。この頃には、卒業後も長い付き合いになる宇野英雄(愛知・拳母高)と中野邦観(日大三高)も入部していた。「早稲田スポーツ」の部員は一挙に増えていった。

21 宇野英雄と中野邦観 一遅れてやってきた「同期」

「早稲田スポーツ」も2年目の昭和35年(1960)になると、部員も増え賑やかになった一方で、創刊以前から活動していた福山と本多の足が次第に遠のいていった。部員は3年生を除いて1年、2年、4年と3学年に亘ってきて、編集会議も活発になってきた。福山、本多は会議を欠席することが多くなった。創刊直前まで仮の編集室として使わせてもらったのが福山の下宿だっただけに、彼らの行動は気になるものだった。

1年後輩の部員は、正規に募集して入部して来た人たちで、みんな真面目で新聞づくりに熱心な学生ばかりだった。この人たちが参加してきたことが、後の「早稲田スポーツ」の継続、発展、拡大に繋がったのは紛れもない事実である。「早稲田スポーツ」の基盤が徐々に確立されつつあった。彼らのことは別項に書くことにする。

まず、創刊期のメンバーと同学年の2人、宇野英雄(愛知・挙母高)と中野邦観(東京・日大三高)のことを書いていく。宇野と中野は「早稲田スポーツ」誕生の半年後に入部してきた。彼らとは、在学中はもちろん、卒業後それぞれの進路は違ったが、ずっと付き合ってきた。ほぼ同じ頃に所帯を持ち、子供が生まれてからは、家族ぐるみの付き合いが続くことになる。

一方で、創刊時のメンバー山崎は、卒業時までには単位が不足して留年になったため、私たちとの付き合いは途切れていった。山崎は人柄のよい真面目な男であったが、結局、麻雀から抜け出せなかったことが留年の大きな原因だったような気がする。山崎には高校時代から付き合いしていた同学年の彼女がいて、かなり頻繁に話が出てくるので、まるで私たちの仲間のように感じていた人である。3月に卒業できなかった山崎と彼女のことはその後も気になっていた。山崎の消息が入ってこなくなったため、卒業後の私たち同期の会合は気が抜けたようになった。同期の原田貞雄(横浜日大高)も次第に部活動から離れて行った。原田とはキャンパスで話が弾み、長い付き合いができると思っていただけに、途中離脱は残念ならない。

宇野は第二理工学部の土木科、中野は第一政経学部の自治行政科の学生だった。創刊メンバーの福山と本多が部に顔を出さないようになっていた頃、入れ替わるように入部してきた。二人とも、私たちとは違った意見が多く、会議での話し合いも面白くなってきた。こうして、松井、宇野、中野、そして自分の4人は卒業するまで一緒に活動する同志となった。

宇野は愛知県挙母市の出身で、高校も挙母高校。ここからは、立大で長嶋茂雄と共に活躍した杉浦忠も出ている。宇野は東海道線の岡崎駅から北にかなり奥深く入った岩倉と言う地の旧家の長男である。今は自動車のトヨタが勢力を伸ばし、挙母市は地名を豊田市に変えている。宇野家は数代前まではその土地の有力者であったという。明治の初め、自由民権運動が盛んだった頃、板垣退助が全国遊説のために来て、宇野家に泊まったという。宇野はその時に板垣退助が揮毫した書を親から譲られ、蔵の中で保管していると話したことがあり、その後、宇野家に行った時に見せてもらった。やはり由緒ある家の長男だった。

宇野の下宿は西武新宿線の沿線、高田馬場から割合近い下落合だったか新井薬師だったかにあったが、西武新宿線の駅が似たような駅ばかりではっきりしたことは覚えていない。新聞の編集や何かで夜遅くなった時など、数回泊めてもらったことがある。駅から歩いて5、6分の閑静な住宅地だった。下宿に着き、彼の後について宇野の部屋がある2階への階段を登った。この時、彼の過剰な神経質ぶりには驚いた。ガサツな自分にはとてもできないことだった。何しろ、息を止めるように静かに階段を上るのであった。音をたてようものなら「静かに!」と宇野の声がした。部屋の中も自分の部屋とは段違いに整理整頓されている。よくぞ、これだけ整理ができるな、と感心するばかりだった。

宇野は、音に対して執拗にこだわった。階段を上る音はもちろん、話も極力小さな声でという要求だった。理由は階下に住む大家からのきついお達しにあるようだった。彼の下宿に泊めてもらう場合には、重要かつ緊急の懸案であっても、大学で話すような大きな声での会話はできなかった。彼と自分とは、案外、性格が反対のところがあって逆に付き合いやすかったとも言える。彼は、強硬な発言はしないし、いつも静かには話していた。

中野も独特な性格を持つ良い男だ。学生時代は山崎と一緒に雀荘に浸っていることが多かった。麻雀という遊びを満足に知らなかった自分は案外交友関係で損をしていたかもしれない。早稲田は大学の周りに麻雀屋が数えきれないほどあり、多くの学生は中毒気味に遊んでいた。しかし、自分は狭い部屋で4人が卓を囲むスタイルが嫌いだった。その後、30代前半に赴任した香港も麻雀の本拠地のような所だった。現地の人も日本の駐在員のほとんどが麻雀に目がなかった。そこでも自分は麻雀に凝らなかった。少しは覚えようと会社で働く社員（中国人）に教えてもらったが、長くは続かなかった。学生時代には「早稲田スポーツ」の仕事が忙しかったこともあり、麻雀は覚えようとしなかった。そうしたことで、中野との接点も少なかったのかもしれない。中野はいろいろなことを知る真面目な男だった。入学後しばらくの間、軟式野球部に所属していたという。彼の出身校の日大三高は野球の名門校だった。しかし、早稲田の軟式野球部には全国の高校から有力選手が集まっていた。そこで、レギュラーを勝ち取ることはかなりの難関だったはず。中野は入部してすぐに見切りをつけていたのだろう。そんな時に「早稲田スポーツ」の話を耳にして入部したのかもしれない。

彼とは「早稲田スポーツ」の編集会議でも口角泡を飛ばすような議論をしたことはなかった。静かに人の話を聞いている時が多かったが、いざ話を始めると積極的に強い発言をしていて、この男は強い気持ちを持っているに違いないと思っていた。本人から聞いた話では、卒業は9月だったという。4月から9月までどのようにして過ごしていたのかは分からない。早稲田には9月卒業になる学生が多かった。8月だったか、中野に会うと、読売新聞に入ったと言う。新聞社に入るために卒業を延ばす人はいくらでもいたので、中野もそうした形で新聞社に入ったのだろうと思った。

中野の卒業後の活躍が目覚しい。

入社早々の時期は地方の支局にいたが、東京に上がると政治部に所属し、大物政治家の担当になった。いわゆる番記者である。それも新人政治家ではなく、後に総理大臣になった田中角栄氏についていたのだから大変なものだった。考えてみると、自分の周りには田中角栄に連なる同級生がもう一人いた。その男は「早稲田スポーツ」には全く関係のないクラス（教育・国文）の友人、野田敏之のことである。彼とは3年の夏休みに一緒に北海道旅行をするほどの強い付き合いがあった。「早稲田スポーツ」以外の友人を作るのが自分にとっては意義があると信じていた。この男とは今も時折会って旧交を温めている。この野田敏之は、学生時代に目白の田中角栄の私邸に通っていた。大学から田中邸に行くには清原教授が住んでいたマンションの横の坂道を上って行くと直ぐに着く。何のために行くのかと、一度聞いたことがある。彼はあっけらかんとして、就職のためだと言った。父親が同郷だとのことである。その成果か否かは分からないが、教育・国文からは入社が難しい日本テレビ放送網に入社した。中野が政治部でバリバリの仕事をしていた時、田中角栄のヨーロッパ外遊に同行した。長期に亘って、後に総理になる男に接してきた話を面白く聞いたことがある。中野の政治部時代の次に聞いたのが異動で移った調査研究本部という部門の話である。初期には「This IS 読売」という雑誌のことを随分聞いた。中野自身も時折、大型の記事を書いていた。購読料ナシで彼は毎月、その雑誌を家に送ってくれたものだ。

読売新聞調査研究本部という部門は新聞記事を書く部門ではなく、調査・研究を主体とする部署であった。この部門にいた時の中野の働きは凄く、まさに本領を發揮した時代であるといえよう。渡邊恒雄氏の指名によって憲法問題に取り組んだ時代である。成果として発表されたのが20年ほど前の「読売憲法試案」である。この極めて重要なテーマに取り組んだために、中野は憲法問題の専門家になった。戦後50年を経た日本では憲法改正問題が大きな問題になっていたため、読売憲法試案の反響が大きかったのも頷ける。60歳を過ぎてから埼玉・川越市にある尚美学園大学の教授に就任し、しばらくして慶應義塾大学大学院からも声がかかり、非常勤講師を務めるようになった。この頃、すでに中野は身体を壊して、川越まで自分で車を運転することが出来ず、若い男を運転手として雇っていた。新聞記者から大学教授というまさに様変わりの転換であった。学生時代の静かな男が日本国の憲法は改正すべしとする試案の主要な任務を担っていたのである。

中野は東京・世田谷区出身で、大学では政治経済学部自治行政学科に在籍していた。中野には山崎と同様、麻雀好きという印象が強く残っている。中野の担当運動部の一つに当然、軟式野球部があった。かつての同僚も多くいたので、取材もしやすかったに違いない。真面目な男で、日頃は「早稲田スポーツ」の活動には不平不満を言わなかった。一つのことには一生懸命に向かって進む男だった気がする。

中野が「早稲田スポーツ」に入部してまだ間もない頃、私たちは「早稲田スポーツ」の編集場所の問題で頭を痛めていた。学内に部室を持っていなかったため、新聞を編集

する場がなかったのだ。そんな時、中野は「家に場所があるからみんなで来てもいいよ」と言ってくれた。渡りに船で、確か5、6人で世田谷区下馬の中野家に行った。

中野邸の門に到着して、門の中に入り、自宅建物まで歩いた。都会の中にある家としてはかなり敷地が広い家であった。門から建物までの距離が結構長かった。建物に近づいて建物全体を良く見るとまさに豪邸である。これが世田谷の邸宅かと感心するほどであった。家は西洋館で瀟洒な建物だった。毎日会っている中野が住む自宅がこれほどの邸宅とは実は思っていなかった。私たちは顔を見合わせてびっくりするばかりだった。家の周りには大きな樹木が茂り鬱蒼としていた。後で聞けば、彼の祖父は元内務官僚でしかも官選の富山県をはじめ、複数の県知事を歴任し、後に出身地の佐賀県から衆議院議員にまでなったという。もちろん、出身大学も東京大学、絵にかいたようなエリートであった。その祖父の友人が読売新聞の社主の正力松太郎氏だったと聞いた。中野は多くを語らなかった。ここが中野のエライところであった。卒業前の就職活動で松井と自分はかなり苦勞していただけに中野のゆったりした就職活動には実は驚いてもいたのだ。私たち二人が揃って大手新聞社を受験し落ちたのとは大きな違いだった。

滅多なことでは怒りを顔に出さないというのが中野の真骨頂だった。どちらかと言えば黙々と仕事をする男だった。そういう彼の態度には、実は人を説得する力が潜んでいたのだ。従って、新聞記者時代以上にその後の大学教授の時代の方が彼の性格に合っていたと言えるかもしれない。

22 同学年の安武哲夫、浅野展行と下本地実

さらに少し遅れて昭和35年(1960)の春に入部して来たのが安武哲夫(福岡高)、浅野展行(修道高)、下本地実(鹿児島・甲南高)それに津本信博(奈良・桜井高)の4人である。特に親しかった津本信博については後に触れることにする。これら4人の同学年の新入部員が入ったおかげで、「早稲田スポーツ」は一挙に人数が増え長い歴史を持つ古参の部にも負けない体制になってきた。発足直後の少数部員のことを考えると様変わり状態になった。4人の入部によって、一時期、「早稲田スポーツ」は昭和34年組が溢れていたことになる。私たち創刊時からいる人間としては驚きと共に頼もしさが倍増した。

安武哲夫と浅野展行はともに文学部だった。下本地実は教育学部の地歴専修だった。一時期、編集会議も賑やかで議論百出して面白かった。安武哲夫は背はあまり大きくはないががっしりとした体格の持ち主で、いかにも九州男児といった風貌をしていた。考え方も常識に裏付けされていた。浅野展行は、見るからに文学青年で口数は多くはなかったが、これはという時の発言には、力があり他を圧倒した。下本地実は、割合小柄な人で早口で喋り方に特徴があった。彼とは鹿児島の歴史を語り合った時の思い出が多い。

しかし、次第に後から入った人間と創刊以来の私たちとの間には、十分な意思の疎通が図れないことが増えてきた。先発組は多くの苦難を乗り越えて来たというある種の

自信があり、後発組には、新聞を発行し続ける先発組に対する幾ばくかの遠慮があったようだ。部会などで議論していても、いつの間にか、先発組だけが発言している状況になっていたこともしばしばあった。その頃、すでに「早稲田スポーツ」には3年生を除く3学年に亘る学生がいた。この姿がまさに普通のクラブ活動においては正常なことである。それでも、創刊以来の人間と新入りの同級生との間には、私たちには、全く気がつかないことだったが目に見えない軋轢のようなものが存在していたのかもしれない。次第にかみ合わない部分が多くなり、自然と一部の人の会議欠席が出てきた。先発組と後から入って来た人たちとの間に、特に険悪になる議論などはなかったが自然に彼らの方から部活動から遠ざかっていったのだった。急に部員が増えてから1年から1年半ぐらい経つと、実質また元のメンバーに戻ってしまったのは何とも残念なことだった。部の運営上、満足なマネジメントができなかったと言える。同学年の人間は減少したが、代わって存在感を示してきたのが1年後輩の人たちだった。長い目で見れば、これが自然の成り行きということかもしれない。

4年生になった時、私たちは「早稲田スポーツ」の活動を完全に1後輩に托し、形の上では引退となった。そのかわり私たちには自由な時間が増え、キャンパスをぶらつく時間も増えて時折、辞めていった元部員に会う機会もあった。みんなとは至極自然に「早稲田スポーツ」の話ができたのは幸いだった。

安武は、出身地・福岡の大手新聞「西日本新聞」に入社した。浅野も地元の広島テレビに就職していた。二人とも頭の良い男だったので一発で希望の地元マスコミに合格したのだろう。鹿児島出身の下本地は、東京で大手配合飼料会社に就職していた。松井と自分がマスコミに見事にはねられたのとは大分違っていた。

23 奈良・東吉野村出身の津本信博

一早大総長選挙に立候補

津本信博は私たちと同じ教育学部国文科の学生で、私たちの前の国文科B組に在籍していた。英語の授業では一緒にならなかったが顔は良く見ていた。ある時、静かに津本信博が体育館事務所の仮部室に顔を出した。同じ国文科の学生が入部してくるとは予想外だった。この時期、後輩や同学年などかなりの人が体育館事務所に顔を出した。新聞発刊の構想段階で部員集めに苦勞したことが嘘のようだった。尤も、創刊に際して部員勧誘の活動を行ったのは教育・国文学科でもC組だけを対象にしていたため、他の二つのクラスには声すらかけていなかった。従って、津本信博は「早稲田スポーツ」の創刊自体知らなかったと言っていた。後に学究生活に入る津本信博は、実は熱烈なスポーツ好きの人間であった。在籍中も、辞めてからも彼と会って話をする時には必ずラグビーの話が中心だった。彼は、早稲田ラグビーが大好きで早稲田に入ってから毎シーズン・毎試合を秩父宮ラグビー場に通って見たという。これは、「早稲田スポーツ」のラグビー担当よりも早稲田の試合を見ていたに違いない。

津本が「早稲田スポーツ」活動と勉強の時間との調整に苦しんでいたことは入部間もなく知った。何回か、そうした状況も彼から聞いて彼の背中を押したのは自分だったかもしれない。中途半端な気持ちでいるよりも潔く決断すべきだと言ったことがある。津本が「早稲田スポーツ」に在籍していたのは1年未満だった。

津本が部をやめてからも、大学を卒業してからも付き合いは続いた。津本は非常に真面目な男でしかも勉強家だった。普段は非常に静かで大人しい男だった。彼と激論したことなど全くなかった。「早稲田スポーツ」を辞めてからも彼自身の気持ちの中には、口にも出さないものの多分に新聞活動に未練があったようだ。会うなり、彼から出る言葉はスポーツのことだった。彼は奈良県東吉野村の出身で高校は桜井高だった。自宅は奈良県と和歌山県の県境近くの東吉野村、村は吉野杉の産地である。高校の桜井市に出るにしても時間がかかり桜井市内で下宿生活を送ったそうだ。津本とは同じ国文科の学生ということもあって、さまざまな機会にさまざまな話をして盛り上がっていた。思い出すと、案外ラグビーの話と同等に奈良の古社寺の話になることが多かった。

津本は、早稲田実業中・高の教師を経て、大学に戻り中世文学の研究に没頭した。早くから「更級日記」の研究では学会でも注目されていた。順調に講師、助教授、教授と階段を上り学部長に就任した。その後、総長選挙に出馬し、教育学部出身初の総長誕生かと言われたが白井克彦氏に敗れた。この時の話を思い出す。自分の自宅の近くに同じ早稲田教育・国文科の先輩の小林保治教授が住んでいた。その隣家が自分の弟の家であり、小林教授宅の息子と自分の息子たちは子供の頃からの知り合いで、中学から早稲田実業に通っていた。世の中には色々と思議な縁があるのだ。しかも、小林教授は大学を出て間もない頃に努めていた高校が、自分が1年間在籍していた都内港区にある東工大附属工高であった。時代の隔たりが多少あり、自分が在籍していた時代と小林教授が勤務していた時代とは違っていた。いつだったか、小林さんから電話が入った。「津本信博君が総長選挙に出ている、しかもかなり良い線を行っていて、総長になる可能性もあるので一応連絡をする」という趣旨の話だった。これにはびっくり仰天、すぐに津本の自宅に電話を入れた。「職員組合からの強い推薦で現在行われている選挙に出ている。しかし、教育学部の地盤がいまいち弱いので実態は苦戦中だ」と言った。私たち卒業生には大学の総長選挙に参加する資格はなく、選挙の行方は大学からの風の便りをあてにする以外に方法がなかった。総長選挙には最初10人ほどが立候補しており、1回目選挙で過半数を取ればそれで決まり、過半数に届かない場合は上位2人による決選投票が行われる由。津本は、この決選投票に残ったのである。さらに続いた情報は決選投票で200票余りの差で敗れたとのことだった。「早稲田スポーツ」在籍者で教育学部初の総長の誕生はならなかった。この総長選挙で示された津本の学内での実力は一級だった。選挙が終わって間もない頃、津本から電話が入り、二人で早稲田・穴八幡神社近くの居酒屋で選挙のこと、「早稲田スポーツ」のことなどを話し合ったものである。

話を再度「早稲田スポーツ」時代の津本のことに戻したい。

津本の担当の一つに水泳部があった。ある日、彼は興奮気味に体育館事務所内の仮部室に入ってきた。「昨日、取材で東伏見に行き、山中毅さんに会ってきた。もの凄いオーラを感じた」と学生水泳界の王者山中毅に会った印象を、を輝かせて言った。彼がこれほど興奮してスポーツの話をするとは思ってもいなかったため強く記憶に残った。津本信博は大変な勉強家であった。従って、私たち部員と違って講義には決して欠席をしない。必ず出て真面目に講義を聴いて勉強をしていた。彼にとっては「早稲田スポーツ」の活動は二義的なもので、勉強が第一だったのは間違いない。彼が「早稲田スポーツ」に在籍していたのは短い期間であったが、学業と共に任された担当の部の取材はしっかりとやっていた。彼の勉強に対する真摯な態度には敬服をしたものだ。教育学部にも随分真面目な学生がいるものだ、と改めて感心させられたものである。津本信博の話でもう一つ。学期末のことだったためか彼は通知表を持っていた。無理を言って見せようと思えば通知表には「優」の印しかない。繰り返して見ても「優」だけである。こういう男もいるんだと改めて驚いた一瞬であった。後で聞くと彼は「大隈奨学金」(返済不要)を貰っていると言った。この奨学金は学業優秀な学生しか貰えず、学部で一人ないし二人だと聞いて再度驚いたものだ。確かに、大隈奨学金受給者の通知表は「優」のみでなければならなかったのかもしれない。また、彼と話をする機会が増えると同時に国文科のほかのクラスの人間を知る機会が増えてきた。

24 逸材が揃った一年後輩たち

—堤哲、堀健雄、山崎英夫など—

1年後輩に優秀な人材が集まったことが「早稲田スポーツ」にとっては画期的で幸運なことであった。詳細に、どのような入部勧誘作戦を展開したかは残念ながら失念した。新入部員の募集は山崎が中心になって行った。大学のメインストリートである大隈侯銅像周辺に机を出しチラシを配って新生に声をかけたのである。

私たち草創期の6人に加え、年長の先輩部員数人が入部して部員は増えてきたが何となく私たちは落ち着かなかった。私たちより学年が上の人たちだけであると、その後の会の運営がうまくゆくのだろうか、との心配が先に立ったのである。そこで、「早稲田スポーツ」誕生からほぼ半年が経った昭和35(1960)年春には新生がドッと入学してくる。私たちは真剣に新入部員の募集を開始したのだった。草創期のメンバーが遣り繰りをして新入部員募集の机に座ったのであろう。そうして、昭和35(1960)年4月に入部してきた後輩たちこそ、「早稲田スポーツ」にとっては正規の二期生になる。結果、粒ぞろいの新生たちが「早稲田スポーツ」に入ってきたのである。みんな真面目な人たちが新聞製作に情熱を持っていることが直ぐに分るほどの面々だった。彼らのその後の努力があってこそ、「早稲田スポーツ」の基礎が固まり盤石な体制構築の第一歩が踏み出せたものと信じている。創刊期に集まってきた私たちは、正面切って新聞づくりをやろうと思っていたとは言い難い人ばかりだったとも言える。第一、無理やり入部して

きたか、入部させられてきた者ばかりだったからである。従って、昭和 35 (1960) 年春に入部した人たちこそ、「早稲田スポーツ」の真の第 1 期生と言っても良いかも知れない。個別に、どのような形で入部してきたのかは覚えていない。山崎茂を中心とした創刊期の人たちの求めに応じて入ったのか、自ら率先して「早稲田スポーツ」に入ってきたのかは分からない。

堤哲 (東京・早大学院)、堀健雄 (東京・板橋高)、山崎英夫 (埼玉・春日部高)、鈴木克宣 (東京・北園高)、佐々木勝衛 (長野・野沢北高)、それに時期的には少し遅れて大熊千種 (東京・東洋英和高) などである。創刊時には、半年後にこのような新入部員を迎えられるなどとは想像もできなかった。目先の新聞発刊に追われ、具体的には常に資金調達に追われていたために先の先まで考えられなかったのが偽らざる気持であった。

1 年後輩たちの活躍ぶりを思い出すまま書いてゆく。

1 年後輩の諸君は、揃って真面目で新聞づくりに情熱を燃やしていた。入部して間もなく、創刊期の部員が持っていた担当運動部も後輩に譲るケースが増えてきた。創刊メンバーは小柄な者ばかりが揃ったが、1 年後輩の諸君はみんな背が高くスマートだった。私たちは見上げるように話をするが多かった。「早稲田スポーツ」の部会で決めたことは、率先してかつ自主的に行動することを旨とした。当然、後輩諸君にもこのことを話したが彼らはむしろ、率先してプラン作り、率先して行動する者ばかりだった。

リーダー格は堤哲である。早大学院出身の彼はスポーツ全般に亘って知識が豊富で行動もスマートだった。東京生まれの彼が持つ先天的な素質だったのか。好漢が揃った同期を良くまとめ、新聞の記事の書き方や紙面づくりに熱心に対応した。特に入部早々の「早慶戦特集号」制作時の働きは群を抜いていた。早慶両校の長い歴史や多くの先輩たちのことも詳しく調べていた。堤哲の各種の記録収集は野球担当にとっては貴重で重要だった。慶應野球部の取材には彼の積極的な行動力が光っていた。慶應野球部のバスに乗り込んで取材するなど、専門家をも凌ぐ取材力を発揮していた。神宮球場ばかりではなく、慶応の日吉グラウンドへも出かけ監督や選手たちから話を聞いたという。

堀健雄は東京っ子らしいスマートさを持っていた。もちろん、彼の家庭環境を知る由もないが、言動の端々には品の良さが漂っていた。取材や原稿書きにも熱心でソツなくまとめた原稿を出した。堀健雄に限らずこの年次の人たちが激しい議論をしていたことは見たことはない。互いに静かに話あっている中に真剣みがあったようだ。思いかえすと、絶えず声高に議論をしていた草創期の私たちに比べるとかなり紳士的だった。

「早稲田スポーツ」を離れた全くプライベートなことで、堀健雄との間には不思議な思い出がある。「早慶 6 連戦」を勝ち、「早稲田スポーツ」の運営も一段落した昭和 36 (1961) 年夏、自分は学部のクラスの友人・野田敏之と二人で北海道一周旅行に出かけた。二人は順調に青函連絡船を渡り、函館、札幌を一通り見て旭川へ出た。この北の町からさらに北の網走を目指してバスに乗った。バスはほぼ満員で、すぐ目の前に関西弁

を話す女子学生の二人連れがいた。そこは若者同士、座席の前と後ろですぐに話をするようになり、お菓子や握り飯などを差し入れてくれた。こんな北の果てに来て関西の女子学生と話ができるとは思わなかった。そんな矢先、同行の野田が「頭が痛い、熱がありそうだ」と言いだした。これは放っておけないと次のバス停で降りることにした。前の座席の関西の女子学生たちに別れを告げ、熱っぽい野田を町の医院に連れて行くことにした。医者は野田の顔を見て身体を触り体温測定をした医師は、即座に「これはおたふく風邪」（流行性耳下腺炎）と診断した。こちらに向かって、「あなたは昔、おたふく風邪をやったことがあるか、やっていなければこれは感染する病気だから注意が必要だ」と言う。子供の頃の記憶はなく、また親からおたふく風邪の話は聞いたことがなく全く分からなかった。旅行中のことゆえ気をつけようがなく、薬をもらって野田を連れて次のバスで網走に向かい宿へ入った。翌日、快晴。野田の熱も下がり落ち着いた。本人もその日の外出は控えるので、自分には出かけて来い、と言う。一人で観光バスに乗って観光名所の網走湖へ行った。湖畔は若い人で一杯、自分もその一人であった。湖畔を歩いていると何と、昨日のバスで一緒だった関西弁の二人の女子学生がいるのではないか。こんなことってあるのだな、と感心しているとさらに驚いた。若い女子学生の傍らには何と堀健雄がいるのではないか。もちろん、堀も別の団体旅行の一員だったようだ。こちらは同行者がおたふく風邪でダウン。湖畔を一人で歩く自分を堀は不思議に思ったのではないか。自分は二人連れ的女子学生に前日の礼を言い、堀にも旅の偶然を話してその場を離れた。その後、堀と京都の女子学生は付き合いを深め結婚にまでこぎつけたのである。縁とは不思議なものだ。

山崎英夫は埼玉・吉川町から通っていた。春日部高校では投擲の選手でインターハイや国体にも出場したスポーツマンである。故障などもあって大学での選手生活は諦めたらしい。投擲の選手らしく堂々とした体格の持ち主だった。「早稲田スポーツ」でも競走部の担当になったのは当然。仕事も堅実にこなす人だった。人を押しつける強引さや小さなことにこだわる性格ではなく付き合いやすい人だった。何しろ、その人なつっこいところが良かった。「早稲田スポーツ」の仕事で遅くなった時など、山崎と地下鉄で途中まで一緒に帰った。彼は、多分、千代田線が北千住で接続する東武電車を使っていたのだろう。日頃は寡黙な男も電車では良く話をした。地元吉川町のことや高校時代のスポーツ大会のことなど、帰りの車中で聞いたものだ。

自分は会社時代、新規事業開発を担当している期間が長かった。そんな時、都心の会社に勤める後輩を訪ねることが多かった。コーヒー1杯で付き合いされる後輩も迷惑だったと思う。しかし、ホンの少しの時間でも後輩たちの顔が見たかった。堀や山崎の会社は大手町、銀座にあった。山崎が勤務する会社、王子製紙は業界最大手の製紙会社、工場が全国各地にあるため、転勤も多いと言う。自分の会社も新規事業開発の勉強会を立ち上げていて、大路製紙の子会社が参加していた。その会社は王子製紙の隣ぐらいのビルに入っていた。早く要件が終ったので九州日南から帰ってきたばかりの山崎に会う

ことにした。背が高く飄々とした雰囲気はまるで学生時代のままだった。

さらに1年後輩には大熊千種（東洋英和高）がいる。逸見素子（日本女子大付高）が男ばかりの「早稲田スポーツ」をやめて間もなくの入部だったのではないか。この人も堤哲、堀健雄、山崎英夫と同様背が高い人である。自分よりはるかに高かった。育ちの良い感じの人でいろいろな知識が豊富で話をするのが楽しい人だった。大学での専攻が文学部の美術と聞いて驚いた。

大熊さんに関連して自分のことをまた書く。考えて見れば、自分も大熊さんと同じ第一文学部・美術専修の入試を受けて合格していた。自分たちの頃の入試には第二次試験として面接があった。ただし、面接試験の時の面接官（教授）との会話が腑に落ちないため、考えた末に二次試験も受かっていた文学部進学をあきらめ教育学部へ入学した。もし、文学部へ入学していれば自分は大熊さんの先輩になっていたのだ。入っていれば「早稲田スポーツ」への参加もなく、人生も全く違ったものになっていた可能性が高い。大熊さんが取りかかっている勉強は「城」の研究だと言った。美術的観点から「城」を勉強していたのかも知れない。部屋の掃除に追われていた逸見さんに比べればかなり違った待遇の部員だった。これも、同期の男性部員の賢明な考えで男性と同様に担当運動部を持ち、記事を書き、広告も取るなど普通の部員として遇していたのである。大熊さんにとっては幸せな待遇ではなかったか。逸見さんと違って、普通の「早稲田スポーツ」の実務ができたからである。

この1年後輩の人たちの結束は見た目以上に強かった。創刊時の私たちがしょっちゅう議論を重ね、時には机を叩き力で物事を決めるようなことは絶対になかったろうと思う。考え方や行動が私たちよりもかなり大人だったに違いない。

1年後輩の人たちには、お互いに社会人になってからも折を見て会っていた。堤哲君が毎日新聞社に入社し地方勤務を経て社会部に戻ってきた。ある時、彼が警視庁の記者クラブにいた時、仕事で霞ヶ関に行った時に寄ったことがある。自分が勤めていた会社の管轄役所は通産省で、自分が役所対応の仕事をしていたために霞ヶ関には良く出かけていた。そんな折に堤哲を訪ねたのである。自分は若い頃に広報課長をしていたこともあり、新聞社や各省庁の記者クラブのことは知っていた。かなり親しく付き合っていた人もいた。電話1本で互いに呼び出したり、呼び出されたりしたものである。さらに、何か会社で問題が発生した場合は直接、家の電話でやり取りしたものである。従って、記者クラブへ入ることはあまり抵抗がなかった。警視庁記者クラブはよくテレビドラマに出てくる場所であるが実際の現場を見たことはなかった。警視庁の記者クラブといえども、他の役所の記者クラブ同様の場所であった。あまり明るい部屋ではなく、些か暗く、かなりゴチャゴチャと書類が並べられている場所である。堤哲もそんな部屋の住人であった。

自分が福岡に赴任していた時には、堤が東京から福岡に来た。多分、JR関係の仕事ではなかったか。久しぶりの再会だったので会社近くの活魚専門店を予約して食事をし

たのではなかったか。福岡には単身赴任中だったので東京からの客は大歓迎だった。懐かしい東京の空気を運んでくるからである。仕事で福岡に来たので多忙の身であったはず、わざわざ電話をしてくれる後輩の心意気には嬉しかったものだ。その頃、堀は旧国鉄本社の記者クラブに籍があり、まさに華々しい活躍の真っ最中だった。当時、JR九州が次々と新しい列車を開発していた頃だったかも知れない。

堀健雄（日本水産）と山崎英夫（王子製紙）については、すでに書いた通りである。自分が新規事業開発の任に当たっていた頃の上司がかなりユニークな人で、業界トップの会社と議論をしたい、については業種は問わず業界トップ企業とのコンタクトを取れとの指示が出た。日本水産も王子製紙もそれぞれ業界のトップ企業であった。日本水産とコンタクトのきっかけは一橋大の野中郁次郎教授の勉強会がきっかけであった。自分はその勉強会のメンバーであり、日本水産のある部長もメンバーだった。早稲田出の人だった。そこを頼りにコンタクトを進めたのである。結果、新規事業開発のプロジェクトチームを発足させ、食分野での新規事業開発を目指した。会議も自分の会社や日水本社が入っているビルで行っていた。そんな折に、時間が空くと堀に連絡をして地下の喫茶店で旧交を温めていたのである。彼も多忙の身であったが必ず時間を割いてくれる優しい気持ちの持ち主であった。

同様の新規事業開発プロジェクトが製紙業界トップの王子製紙との間にもあり前述のような山崎との懇談ができたのである。王子とは京都・北山杉を対象にした事業だった。林野庁が絡む仕事だった。これも、多々、問題点が出て事業開発は実現しなかった。事業開発中にユニークな体験をした。事業を進めるには北山杉の現場を見る必要があると判断し王子の京都の社員と一緒に京都北部の山中へ出かけた。映画に良く出る北山の風景はなかなか美しい。車で杉林に囲まれた道を若狭方面に進んでゆくと、人影がないのに杉の一番高い部分が微妙に揺れている。いわゆる枝打ちという作業を行っているという。珍しい光景だった。そんな事業を進めている最中に本社に戻った山崎とも会った。

ただ、堀、山崎両君とも自分が関係したプロジェクトとは所属する部門が違い直接的な関係はなかった。

25 「早慶戦特集号」の発行で大議論

「早稲田スポーツ」を始めて最初の半年から1年間は、多忙でありながらあっという間に過ぎた。それほど新聞づくりに夢中になっていた。メンバーは教育・国文クラスCの中でも比較的話をしていた六人だったが、次第にそれぞれの性格が前面に出てしばしば衝突することが多くなった。いつも一緒に行動していたのはリーダーの松井盈と自分、それに山崎茂を加えた三人である。ほかの人たち（と言っても3人）とは些か違った動きをしていたように記憶している。しかし、3人は極力、他の部員の行動に口を挟まないことにした。新聞を始めた時、全員が同じ1年生であったが年齢的に上だったのは原田と福山と自分。次が現役入学の松井、山崎と本多の3人、彼らはまだ18歳だっ

たと思う。

松井と自分の行動はいつも一緒だったので、会の他の人間から見ればかなり異様に見えるかもしれない。ただ、二人はいつも、「早稲田スポーツ」をどうしたら良いか、広告取りをどうするか、新聞がもっと読まれるようにするにはどうしたらよいか、など硬い話ばかりをしていた。

「早稲田スポーツ」に対する二人の熱心さが募って、というよりも単純に感情が高ぶって二人はついに大衝突することになった。新聞会の仮部室が西門近くの体育館1階にあったので、必然的に西門近くの喫茶店を会合で使うことが多かった。薄暗い喫茶店でむさ苦しい男たちがいつもガヤガヤワイワイやっているのだからいくら空いている店といってもあまり良い気持ちはしなく、むしろ迷惑なことだったに違いない。1年生の終わり頃か、あるいは2年生になったばかりの頃だったか、例によって定例の会議を喫茶店で行った。議論が沸騰したのは野球のことであった。この日の会合は「早稲田スポーツ」の編集方針を確認するのがメインテーマだった。全員がいたのか、創刊メンバーだけだったかは確たる記憶がない。後輩と一緒にいたという記憶もないので、新入生が入ってくる前、昭和34年の暮れか35（1960）年春先だったと思う。編集長・松井の考えは創刊当初から、早稲田の体育局に所属する各運動部の記事を公平に載せるべきだとしていた。当然、私たち全員も松井の考えに賛同し新聞づくりに励んだ。

年が明けた頃から、新聞が売れなければ「早稲田スポーツ」の存立基盤がなくなるのは目に見えていた。学生が好む記事をより多く載せないと売れない、そのためにはどうすればよいか自分の頭の中では大問題だった。平等に記事を載せるというのではなく、当然のことであるが新聞全体にメリハリをつけるべきだという考えである。「早稲田スポーツ」の特徴もメリハリの利いた紙面から出ると信じていた。

具体的には学生が好む野球の記事を多くして学生の関心を引き付ける努力が大事だと思っていた。その頃は、まだまだ学生野球が盛んに観戦されていた時代で、早慶戦ともなれば5万人を超える大観衆が神宮球場に押しかけていた。「早稲田スポーツ」拡販のカギがそこに潜んでいると感じてならなかった。松井にしてみれば野球は西川の担当、そこにこだわれば「早稲田スポーツ」本来の目的が損なわれてしまう、強硬に突っ張ってきた。さらに、自分の担当部の記事ばかりに重点を置くという考えが気に入らないと言う。創刊号の準備に忙しかった頃に秋の早慶戦があった。「早稲田大学新聞」が作る中途半端な早慶戦特集号が次から次へと売れてゆく姿を目の当たりにした。この様子が野球の記事が持つ力強さを見る思いだった。松井の「各部平等に扱う」という創刊以来の精神は十分に承知していたが、「早稲田スポーツ」が創刊以来持つ販売面での苦戦は如何ともし難く、このままでは板野寿夫さんからの借金も返せないことになる、との不安の方が先に立った。自分は、春秋の早慶戦の時に作る「早慶戦特集号」が絶好の拡販の機会であると思っていた。元来、二人の野球に対する考えが両極端であることは百も承知で議論をしていた。議論の初めから話のはかみ合わない。彼からは信念の「各部

平等に扱う」という言葉が頻繁に出て、野球の特集号などとんでもないという考えが根底にあったようだ。

それまでも、いろいろ二人は意見が合わないことがあったが、右か左かを決める時には大概、松井の意見に従ってきていた。しかし、この時の特集号発行に関しては一步も譲れないと思っていた。自分が明確に松井に反対の意見を言ったのはこの早慶戦特集号発行問題が最初だった。

「早稲田スポーツ」は体育局の機関紙でもなければ大学のお抱え新聞でもない。はっきりとした主張を持って新聞を発行するからには記事の取り扱いに強弱があってもよいと言うのが自分の主張だった。二人の論議は留まるところを知らずに続いた。二人が口角泡を飛ばすも、他の部員は案外冷静に聞いていたようだ。二人の間に割って入る部員はいなかった。部会の会場は喫茶店の中、激論には何とも都合の悪い場所だった。ほかの客、多分一般学生は私たちの険悪な議論を不思議そうに眺めているだけだった。新聞の他の部員に叱られそうであるが、そのダンマリには「早稲田スポーツ」を強靱な体力のある新聞に育てて行こうとの気概は感じられなかった。まして、二人の中に入って独自の意見をいう者もいなかった。松井と自分の二人だけが懸命に議論をしていたのだ。

二人の議論は堂々巡りを繰り返しラチがあかなかった。そのうち山崎が、「二人が力づくで決着したらどうだ」と、他人事のように言い出す始末。喫茶店の中で激論を戦わすのはまずいと思ったのかも知れない。山崎は続けて「甘泉園に行こう」と言う。松井も自分も後には引けなくなっていたので、この言葉に誘われるように外へ出て、甘泉園まで歩いた。自分も、こうなったら何としても引くわけにはいかないと強く思っていた。二人は甘泉園の広場のような場所を見つけて、山崎が言うままに、何回も、相撲のようなレスリングのような格好で力を競い、決着をつけようとしていた。何とも笑い話のような出来事だった。二人とも同じような背恰好の痩せ男、迫力も何もあったものではない。痩せ学生のはかなさ、次第に双方とも疲れが出て、「この辺でやめよう」となった。しかし、この力づくが「早慶戦特集号」を決める要因となったことは間違いない。

「早慶戦特集号」を作るからには全力を挙げよう、と松井もさっぱりしたもので、改めて部員全員の前で特集号発行の宣言をした。しかし、やはり二人は若かったのだ。なぜあの時、もう少し理論的な議論を展開しなかったのか、言われるままにいきなり力づくで決めようとしたのだろうか、今となって幼稚な決着に対して後悔の念が強い。「甘泉園の決着」によって、「早稲田スポーツ」の「早慶戦特集号」が誕生し、毎年代わる学生たちの手で脈々と半世紀以上に亘って引き継がれていることには喜ばしいことと言えよう。今や「早稲田スポーツ」の「早慶戦特集号」は、神宮球場の名物にまでなっている。

26 野球部マネジャー黒須陸男さん

なかなか掲載の決断がもらえない効率の悪い広告活動をしながら、野球担当の自分は神宮球場に通った。広告取りと取材と言う二足の草鞋で身体が二つ欲しいと思っていた。まだ、「早稲田スポーツ」を創刊する前に体育局を通じて野球部とは連携ができていて、特に野球部のマネジャー黒須陸男（埼玉・熊谷高）さんの計らいで神宮球場には自由に入れることになっていた。黒須さんの理解と好意のお蔭である。黒須さんは、いかにも運動部の人間と言わんばかりの端正な顔立ちの人だった。いつも学帽をキチンと被り、黒の学生服で、これぞ「早稲田の運動部の学生」というスタイルだった。話す言葉にも無駄がなく折り目の正しい人で、この人だったら何でも正直に話してくれるに違いないと思った。私たちは入学して間もない1年生、3年生の黒須さんに話しかけるのにも肩に力が入っていた。「あまり緊張しなくていいよ」と言ってくれたのは最初の出会いの時に、質問の中身までも見透かされているような気がしたものだ。

初対面の時、「早稲田スポーツ」創刊の経緯をかなり詳しく説明をした。さらに、失礼だったが記事を書くために神宮球場で行われる早稲田の試合を見せてもらいたいと申し出た。あまり強硬には言えなかった記憶がある。そのあたりの感情を黒須さんはいち早く感じとり「リーグ戦が始まるまでに、ちゃんと入れるようにする」とはっきり言ってくれた。六大学野球連盟には長船騏郎事務局長という厳しい人がいることも知っていた。黒須さんと事務局長との間には大変な交渉があったことが推察された。結局、記者席に入るには、試合前に球場正面入り口で黒須さん呼び出して入る、という方法が決まった。つまり、「早稲田スポーツ」の入場は早稲田の野球部が保証する形になったのである。これがその後の神宮球場通いができる第1歩であった。

昭和34（1959）年の秋のシーズンが始まると、神宮球場通いが始まった。黒須さんが言ってくれた通り、球場の正面玄関に到着してすぐに係りの人に早稲田野球部のマネジャー黒須陸男さんに会いたいと申し出た。間もなく出てきたのはサブマネジャーの駒井さんだった。駒井さんともすでに会っていたので何の違和感もなかった。駒井さんは一緒にネット裏の記者席まで案内してくれた。もちろん決まった席はないので適当に空いている所に座っていると説明をしてくれた。記者席には大手新聞社の「朝日、毎日、読売、産経」などに加え、スポーツ専門紙の報知、ニッカン、スポニチ、サンスポなどの記者がいた。さらにNHK、日テレ、TBS、フジなどテレビ会社数社が入っていた。一応、椅子の背の部分に新聞社の名前が書かれていたのでこの人間が来ているかはすぐに分かった。ただ、新聞記者たちは決められた席には座っていると限らなかった。キチンと最初に挨拶をしたことが黒須さんには良い印象を与えたのかも知れない。それでも、毎試合ごとに球場正面玄関にわざわざ黒須さん呼び出すことは大変気の引けることであった。人の良い黒須さんは会う度に「ご苦労様」の一言を言ってくれたことが大変嬉しかった。黒須さんは実力を認められたか、2年連続でマネジャーを務めている。自分は2年間連続して神宮球場の入り口で黒須さんに会ったことになる。黒須さんは4年生のシーズンが終わった時も、次のマネジャーにキチンと「早稲田スポーツ」の「記

者席入場」の引継ぎをしてくれた。「早稲田スポーツ」は、創刊号の制作段階から神宮のネット裏の記者席に入って試合を見ることができた。取材と同時に、ピッチャーの真後ろから見る野球の醍醐味を存分に味わうこともできた。隣のプロの記者たちの中には半分サボっているような態度で試合を見ている人もいた。一方で、記者席には多くの早稲田出身の先輩たちが取材する側の人間として来ていた。神宮のネット裏で多くの人たちに会うことができたのは全て黒須マネジャーのお蔭である。

神宮球場のネット裏で多くの早稲田の大先輩たちに会えたのは自分にとっても大きな収穫だった。戦前の大投手、小川正太郎氏（日本社会人野球連盟）をはじめ、末吉俊信（毎日新聞）の両投手、捕手で監督経験もある伊丹安廣（神宮外苑長）さんなどが野球部、ほかに日本テレビアナウンサー赤木孝男氏などが記憶に残る人である。初対面の場所はみんなネット裏の席だった。この人たちのことについては別項で書きたい。

黒須陸男さんやその周辺についてももう少し書いてゆく。

「早稲田スポーツ」を始めてからの自分は、必然的に人の付き合いが変わり、部員のほかには運動部の人たちが中心になった。新聞も創刊して半年もすると学内でも次第に知られる存在になった。教室などで思いもかけぬ教師から「頑張ってるね」と激励を受けたのにはびっくりした。学内とはいえ、スポーツ専門新聞を作る人間としては、常に運動部の情報を得なければならない。そこで、「これは」と思うことがあればまず該当の部のマネジャーに会いに行くのが常であった。マネジャーに会っていろいろな情報をもらい、必要があれば選手本人に会うことになる。従って、私たちの情報源は自ずとマネジャー中心となる。新聞を始めた頃は、こちらが一年生でマネジャー諸氏は殆どが四年生。大学で、しかも運動部で三年も学年が違うとなれば大先輩、なかなか対等に口など利けない立場になる。自分も最初は直立不動の姿勢で敬語を使ってマネジャー諸氏と話をしたはずである

黒須さんはすでに書いたように3年生で正規のマネジャーを務めていた。しかし、やっぱり大先輩、対等に話をしてもらっているようでもかなり緊張した。真面目な人だけに話を崩せなかった。当時の自分たちの立場は大体このようなものだった。ただ、その後、何年か経ってかつて運動部のマネジャーだった人に会うと「あの時、君は1年生だったのか」と呆れられることが度々あった。もしかすると、こちらは緊張感で一杯だったのに、先輩から見ると変に落ち着いて見えたのかも知れない。否、単なる老けた学生だったのかも知れない。運動部のマネジャー諸氏は、私たちが1年生ばかりで「早稲田スポーツ」を創刊したとは思っていなかったらしい。

野球部主将だった早実出身の徳武定之さんからも後日、同じことを言われたものだった。

野球部のグラウンドはキャンパス隣接で、気がつけば自分は安部球場のネット裏にいたこともしばしばであった。自分は早稲田の一般学生も母校の野球部のニュースは知りたいに決まっているといつも思っていた。野球部のレギュラークラスは安部球場から歩

いて5分ほどの住宅地にあった「安部寮」に住んでいた。ほかの運動部は、一部が大学構内か、離接地に練習場を持っていたが、大半の運動部は西武新宿線・東伏見に合宿所と練習場を持っていた。ただ、野球部は大学と至近距離の場所に専用グラウンド（安部球場）を持っていた。長い歴史を持つ運動部の特権かも知れない。都心の大学で、当時、これほど「教住近接」、あるいは「教場近接」は非常に珍しかったに違いない。早稲田の野球部の選手たちは非常に恵まれた環境にあった。安部寮と安部球場との数百メートルは監督も選手たちも歩いて往復していた。野球部にはチームがいくつものできるほど多くの選手がいた。しかし、「安部寮」に入ることができるのはレギュラークラスだけだった。安部寮入寮は野球部選手にとっては一種のステータスになっていた。地方から出てきた選手にはその考えが一層強かった、と土佐高出の公文博孝から聞いたことがある。「若い頃は安部寮に入ることが夢だった」と。黒須さんもレギュラークラスの選手と一緒に安部寮に住んでいた。従って、野球部の情報を得るには、「安部寮」に行き、黒須さんに会うことが絶対に必要だった。「安部寮」の名称の由来は、早稲田野球部の産みの親であり、最初に野球部長を務めた社会学者の安部磯雄に因んでいる。自分は1年生から3年生までの間、安部寮に行き、黒須さんや次のマネージャーに会い、いろいろな情報を得、反面、多くの面倒をかけたことになる。黒須さんの2代後輩のマネージャーは自分と同じ学年の杉浦康之（愛知・岡崎商高）だった。3年生、4年生になると杉浦康之との付き合いが当然のことながらかなり頻繁になった。

大学を卒業して暫く経って、自分の出身中学の後輩、というよりも自分の教育実習時のクラス（千葉・柏中）の生徒・谷澤健一（習志野高）が早稲田に入った。当時のマネージャーにも神宮で谷澤健一の情報をもらったものである。谷澤健一のことは別項で書くことにする。

27 野球部監督・石井連蔵氏

運動部の試合はどうしても土・日が多い。しかも、試合は都内で行われるとは限らない。地方で行われる試合はどうしても見に行けないのが実情だった。こんな時には身体が二つあっても足りなかった。当然のことであるが、一つの部の取材に出かけると他の部の試合は見られないことになってしまう。従って、学生が興味を持ちそうな、つまり人気があり、観客動員数が多い試合に行くようになるのは致し方ないことだった。

そんな中で、自分が担当の野球部については、大変なことも多かったがいろいろ恵まれていた。子供の頃から野球は好きで新聞の野球欄は欠かさず読んでいた。また、僅か1年とはいえ中学校3年生の時、担任教師の無理強い勧誘で野球部に所属して田舎の広いグラウンドを駆け回っていた経験があった。新聞で読む学生野球の記事が好きで、中でも早稲田のニュースを追っていた。当時の福島、末吉、石井（連蔵と藤吉郎）、小森、蔭山、広岡などの名前はそらんじていた。春秋のシーズン時には、朝、新聞が配達されるのが待ち遠しいくらいに待っていた。そんな早稲田の野球の試合をいつも見て記事が

書けることはやはり幸運だった。いつも観客の多い神宮球場で取材ができ、多くの選手に直接会えて話が聞けたのである。さらに、ネット裏には往年のスタープレイヤーが試合を見に来る。ただ、今、考えるとややミーハー的気持ちは強かったのも正直なところである。

野球部監督は、水戸一高出身の石井連蔵氏である。現役時代には投打に大活躍をした人である。中学時代に新聞で読んだ記憶の人でもあった。ピッチャーをやり、しかもクリーンアップを打つ人でもあった。このかつての名プレイヤーを毎日、安部球場の練習で見ることができたのである。もちろん、その時はバリバリの現役監督、と言うよりも青年監督と呼ばれていた。

野球部の担当者が毎日のように安部球場へ練習を見に出かけるのは当然のこと。安部球場で見た石井連蔵氏のスケッチをしたい。見るからに強面の人で、正面から見詰められただけで気の小さい人は震えあがってしまうほどの眼力を持っていた。グラウンドに近いスタンド下段からは監督の一挙手一投足が良く見えた。石井には人を寄せ付けない雰囲気があり、それが厳格と言う表現で良いのかどうかは分からない。野球部の練習は大学北側の安部球場で行われる。現在の中央図書館がある場所である。現在、野球部の練習場は東伏見に移転しているが図書館に入る門を潜って直ぐ右側に安部球場があった印の記念の一角がある。安部球場跡の碑文と安部磯雄、飛田穂洲両氏の胸像が建っている。安部球場時代の丁度ライト側の塀際である。碑と胸像が建てられている場所は一段高くなっていて、玉砂利が敷かれている。時折、所用で中央図書館に行く時には、必ず二人の碑の前でしばし佇むことにしている。安部磯雄にはもちろん、会ったことがないが飛田穂洲さんには黒須マネジャーの計らいで、インタビューをし、「一球入魂」の文字を書いてもらった忘れ得ぬ人である。

「安部球場」で行われていた野球部の練習にはかなりの一般人も見学に来ていた。かつて、「最後の早慶戦」が行われた球場であったが、すでにその頃も古い球場だった。スタンドはやや怪しい場所だった。コンクリートが打たれたスタンドであったが所々は崩れていたのである。むき出しになった鉄骨にも錆が一杯ついていた。練習が行われる日には多くの熱狂的早稲田ファンが集まっていた。しかも、黙って見ているだけではなく、必ず大きな声で選手にゲキを飛ばしていた。怒号もあったのは面白いことだった。

野球部の選手も監督も安部球場へはユニフォーム姿で近くの安部寮から歩いてきた。来る時は幾らか坂を下り、帰る時には幾らか上ってゆく。監督に存分にしごかれた選手たちにとって帰りの道のりはかなり長い距離に感じたに違いない。しかも、みんな泥んこにまみれた姿のまま帰っていった。まるで、テレビで観た関ヶ原の合戦で敗れた西軍の将のような姿だった。石井監督の特に思い出深い印象は、選手に分け隔てなく強い姿勢で臨んでいたことだ。つまり、強面の指導の中に選手を平等に見ていたことであつた。自分が2年生になった時、野球部の主将は早実出身の大型3塁手・4番バッターの徳武定之だった。キャップテンは練習時でも選手の先頭に立ってキビキビと動くこと

を求められる。部員を纏めてゆく任務があるため、石井監督も人一倍力を籠めて徳武主将に接していたようだ。

ある時、監督の猛烈さを目の当たりにした。彼は恒例のレギュラークラス一人ひとりに対するノックをやっていた。監督自身、必死の形相で各選手にノックボールを打っていたが3塁手の徳武定之に回ってきた時、監督の態度は一瞬で変わった。ほかの選手よりもさらに強烈なノックを始めたのである。それまでの選手たちには決まったように5分くらいで終えたが3塁手に対してはノックバッドの手を緩めず、バットを振り続けた。見ている方も監督は異常ではないかと思ったほどである。すると監督は徳武にキャッチャー用のプロテクターとマスクを付けさせた。そして、徐々に徳武を前に出し、ノッカーの監督との距離が近づいてくる。彼はノックボールを目の前と言えような近さで受けるようなものだった。それでも強いノックボールを懸命に捕球しようと身を動かす。20分、30分とノックが続く。見ている方がハラハラしてくる。スタンドの上段から「選手が倒れるぞ」との声が聞こえてきた。監督の必死の姿に大きな声が出ずに小さな声になっていた。練習を見にきた全員がホームベースを挟んで続く猛烈なノックに集中している。自分はたまたま取材だったが、次第に個人的にも「徳武選手が可愛そうだ」と思えてきた。しかし、徳武も倒れそうになりながら、やめて欲しいとの態度はとらずに、どんどん前に進んでゆく。これぞ早稲田の練習だ、と石井監督は示していたのかもしれない。この猛練習がいつ終わったのかは、実ははっきりと覚えていない。その練習以降、徳武さんの姿を見るたびに清々しい中にも凜とした逞しさを感じたものだ。そして、この監督の練習に早稲田野球の精神を見たような気がした。この練習の成果は、その年(昭和35年)の秋の球史に残る早慶6連戦で実を結んでいる。

その頃、東京6大学では長嶋茂雄が卒業したばかりだったが、相変わらず立教が強かった。東大を除いた各大学の實力にはあまり差がなく、早稲田と慶応は實力が拮抗していた。リーグ戦最後の早慶戦で優勝が決まるが多かった。必然、安部球場の練習にも熱が入るのは当然である。

練習時の安部球場には、既述したようにいつも数十人の熱狂的なファンが集まっていた。常連の早稲田ファンで神宮球場でも良く見かける顔ばかりである。彼らは選手一人一人のことを細かく知っていた。声を出す時も、選手の名前をフルネームで呼んでいた。斜めになったスタンドから叱咤激励が飛ぶ。球場は相当古く、スタンドも弱っていた。見ていて危ないと感じたことは一度や二度ではない。集まった人達の罵声のような大声は、選手に対する一種の愛情表現にも見えた。野球部の練習時の声は構内を歩いていても良く聞こえたものだった。

石井連蔵監督には、1年生の時はもちろん、2年生になっても二人だけの十分な取材ができなかった。こちらの質問に、強面の顔で「何だ勉強が足りない、もっと詳しく調べてから来い」と言われそうだった。しかし、こちらも新聞、いつまでも遠慮しているわけには行かず、昭和35(1960)年秋の早慶戦特集号の時に思い切って安部球場の出

口で質問した。その秋の早稲田の戦力についてだった。叱り飛ばされるかと思ったが、案に相違して、「これから安部寮に帰る、歩きながらでも良いか」といっくらか茨城訛り返事だった。思わぬ態度だった。顔には安部球場で見た鬼の形相はなく、柔和な顔になっていた。つい先刻まであれほどの強烈なノックをして激情を身体全体で表していた人が別人になったのだ。とても同じ人には見えなかった。グラウンドの鬼であった人がガラッと変わってまるで紳士だ。石井連蔵という人はそういう人だった。実にきっぱりとした礼儀を心得た人であり、早稲田の偉大な先達、飛田穂洲の神髓を心得ている人だったのだ。ただ、かなり強い茨城訛りが残る人で、時には言っていることが分らずに困ったものだった。

対照的な思い出がある。もちろん深い付き合いがないため、単なる表面だけの印象であるが。昭和 35 (1960) 年秋の早慶戦特集号の取材で慶応三田のグラウンドに行った時のことである。早稲田安部球場での石井連蔵監督の死に物狂いの猛練習を見た後だけに、慶応前田祐吉監督の練習光景には実に強烈な印象が残った。前田祐吉監督は石井連蔵監督とは学生野球界の双璧の名監督だ。早稲田から日吉までは渋谷で電車を乗りついで遠征である。日吉の大学校舎とは反対側に歩くと周囲は畑。その畑に囲まれたところに慶応野球部のグラウンドがあった。早稲田の安部球場のようなグラウンドの周りにスタンドはない。OBらしい人が、グラウンドで練習をしている選手の周りを遠巻きにして見ているがみんな静かである。優雅な感じの練習だ、というのが第一印象である。

グラウンドに到着して、さて、監督がどこにいるのかとしばらく探す始末。それほど野球部の身体の大い人間に囲まれた前田監督の姿が見つからない。びっくりしたのは、監督と選手とがまるで友達のような感じで接している姿だった。前田監督は背が大きい選手たちの中に埋もれていて見えなかったのだ。

練習が終わってから直接監督に話を聞こうと待っていた。それほど厳しい練習ではない。選手も笑顔で監督と話をする。監督を呼ぶのも「前田さん」と「さん」づけである。早稲田では想像すらできない光景である。笑顔、笑顔の日吉グラウンドだ。早稲田の鬼監督率いる練習とは全く違う和やかな練習風景だった。それでも日が暮れるまで練習は続いた。キャプテンらしい人、多分、渡海昇二さんだったと思うがグラウンドの中心に来て練習終了を選手に告げた。ところがここからがまた驚きだった。目を疑った。選手と監督がお互い煙草を吸い出したのだ。和やかな会話も聞こえてきた。慶応は福沢諭吉の平等の精神が横溢しているのか。「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」(「学問のすすめ」)を地で行っているのかもしれない。直接会った前田監督もなかなかの紳士で、こちらの質問に一つ一つ丁寧に答えてくれた。あまりにも早稲田の練習とは違った光景で驚き、質問の中に、「慶応の練習はいつもこうですか」と聞くと「まあ、こんなものです。早稲田は厳しいのではないですか」と言った。もしかすると、前田さんは石井さんの練習風景を知っていたのかもしれない。早稲田と慶応はそれぞれあらゆる分野でライバルである。しかし、野球の練習一つ取っても大きく違っていたことに大

変驚いたものだった。

28 「週刊現代」からの取材

寒い頃だったので、昭和 35（1960）年の春先だったか、一本の電話が体育館事務所に入った。いずれにしても「早稲田スポーツ」を創刊して間もない頃だった。「早稲田スポーツ」の話を知りたいので取材をしたいとの内容だった。講談社の週刊現代という雑誌からだった。その時、編集長の松井が事務所にいたのか、あるいは、彼がいなくて自分が出たのかははっきりしない。当然、松井に無断でマスコミ取材を受けることはないので、彼の了解を受けて自分が対応したのであろう。この頃は週刊新潮に端を発した週刊誌ブーム到来の時である。講談社が「週刊現代」を発行したのもちょうどこの頃だったと思う（注：正しくは昭和 34 年創刊）。

取材に来た宮本記者も、ウチは後発で苦戦中だと話していた。髪は無造作で、一見サラリーマン風ではなかった。彼は、今いろいろ取材の幅を広げている、従って、大学にも取材を広げたのだとも言った。ところで、宮本記者はなぜ早稲田に来たのだろうか。会って、受けた質問は、なぜ大学でスポーツ新聞を出すのか、その目的は何か、第一、大学生が学生スポーツに興味を持っているのか、さらにそうした学生が発行する学内のスポーツ新聞を買って読むのか、ということだった。発言の端々にかなり批判めいた意味が籠っていた。ただ、この人は、大学の中では何をやるにも本来、自由なのだからスポーツ新聞を出すのも自由だ、これからも頑張ってくれ、との激励の言葉を残して帰った。こちらは、当時、「週刊現代」の何たるかも良く知らず聞かれたことだけを話した。記者が大学内にスポーツ新聞が創刊されたこと自体ニュースで面白い、と言っていたのが印象に残った。

取材された話を松井に報告しても大した興味を示さなかった。しばらくして記者から「週刊現代」が送られてきた。「大学にもスポーツ新聞出現」的な見出しがついた小さなコラム記事が、載っていた。週刊誌の中ではかなり地味な扱いだった。部内にも大学の他の部署からも何の反応もなかった。ただ、これが「早稲田スポーツ」にとっては最初の広報活動ではなかったかと思う。

29 日本記録を作った競走部・藤井忠彦選手からの差し入れ

大学（体育局）がチャーターした箱根駅伝伴走バスに乗り「早稲田スポーツ」として初めて箱根に行ったのは、「早稲田スポーツ」創刊間もない昭和 35（1960）年 1 月 2 日である。応援のバスからは走る選手の姿はほとんど見えず、車窓の外の景色ばかり見ていた気がする。その駅伝からしばらく経った頃、思わぬ人が体育館を訪ねてきた。箱根駅伝にも出場し、長距離では日本学生陸上界最強の選手であり、日本記録も樹立していた競走部・藤井忠彦（山口・宇部高）選手だった。藤井選手は努力の人で宇部高校から社会人（宇部興産）を経て早稲田に入学してきた努力の人だった。従って、普通に入

学して来た人よりは多少年齢が上だった。入学後のインカレで大活躍、早稲田のエースとなった。言うなれば早稲田のエースと言うより日本のエースでもあった。もちろん、1月の箱根駅伝では主将としてチームを引っ張った（箱根駅伝の結果は総合第5位）。

たまたま、自分が体育館事務所前の広場に出ていた時であった。体育館近くの細い道を西の方から歩いてくる藤井選手を迎える形になった。見覚えはもちろんあったが、まだ話をしたことがなかった。競走部の担当は山崎だったので、山崎が出来上がったばかりの「早稲田スポーツ」を持って東伏見のグラウンドに行き、藤井さんに会っていたのであろう。従って、藤井さんは「早稲田スポーツ」のことを知っていた。藤井さんは長距離選手特有の均整のとれたスマートな身体の人であった。小脇に紙袋をもっていた。山崎がいなかったので自分が対応した。『早稲田スポーツ』も随分頑張っているね、このあいだの箱根駅伝前の号では、1面で紹介してもらいながら良い成績が出せなくてすまなかった。今後、必ず後輩たちが頑張ってくれると思うので、よろしく」と言って脇に抱えていた紙袋を差し出した。紙袋の中には原稿用紙が一杯詰まっていた。「原稿用紙は皆さんで使って欲しい」と言って差し出したのである。一瞬、戸惑ったが、藤井選手の好意に応えるべく「差し入れ」は気持ちよく受け取った。もしかすると、競走部のグラウンドで山崎が藤井さんと会って話をいた時に「早稲田スポーツ」の苦境を話したのかもしれない。こうした形での差し入れは初めてのことで、しかも日本記録を作ったことがある有名選手からの差し入れには頭が下がる思いであった。直接、原稿用紙を受け取った自分がどれほど藤井さんに感謝の意を表わせたか、否、むしろ多分にぎごちなく受け取ったに違いなかった。藤井選手が言うには、早稲田に学生スポーツ専門の新聞ができたこと自体うれしい、それに12月の新聞で1面に箱根駅伝を取り上げてくれたことが本当に嬉しかった、この原稿用紙はホンのお礼のようなものだとも言った。話をしている藤井忠彦選手が随分真面目な人だという印象が強く残った。さすがに社会人を経験して来た人だと感心した。

藤井選手が言っていた「早稲田スポーツ」の箱根駅伝の記事は昭和34（1959）年12月に発行した「早稲田スポーツ」の2号である。正月に行われる箱根駅伝を1面トップで取り上げ、“新春初頭を飾る 箱根駅伝”という大きな見出しを付けたややギョチナイ紙面だった。戦力予想と選手紹介を詳しく書いた。中でも主将の藤井選手は、写真入りの談話を紹介した。談話を取ったのは担当の山崎だった。この取材の時に、山崎は「早稲田スポーツ」の話を細かに藤井選手に語ったに違いないと改めて思った。

30 軽井沢・信濃追分で初の夏合宿 一浅間山登山も敢行一

「早稲田スポーツ新聞会」の会長・清原健司教授のことについては先にも書いたが、草創期の軽井沢追分の清原別荘で行った夏合宿は特に記憶に残るものだ。この頃になると、「早稲田スポーツ」の評価も出はじめ、私たちは安堵の気持ちを持った。清原さんに対する体育各部からの評価も高まっていた。清原さんの真面目な性格と分け隔

てをしない公平な態度が好感度の原因だったと思う。

最初に清原さんに挨拶したのは体育局だった。松井と山崎それに自分の3人で教務主任室に行った。儀礼がましく硬い挨拶をしたような気がする。それよりも、清原さんの印象は、自宅に伺った時の方が強かった。清原家のことについてはすでに書いたがさらに書く。清原さんの自宅は大学から歩いて10分ほどの高田豊川町のマンションだった。早稲田の北側、つまり都電早稲田駅近くの大通りを渡り、神田川を渡った先の坂の登り口のマンションの4階にあった。清原さんは、当時まだ少ない鉄筋コンクリート造りのマンションに住んでいた。第一、大学からも近く、何よりも静かな環境が大学教授には良かったのかも知れない。

清原さんは昔で言うなら六尺豊かな男であった。しかし、それほど威圧感を持たない人で第一、何ごとにつけ優しい人だった。体育局教務主任室で会った初対面の印象は「大きく真面目な人」という印象しか残らなかったが自宅では、さらに学者としての威厳があった。それでも硬い威厳ではなく、何でも話す好々爺的な優しさがあった。さらに会って話をするうちに身体は大きいが繊細な精神の持ち主であることもわかった。私たち、まだ入学したばかりの1年生に対しても丁寧な口をきいてくれた。新聞会のメンバーは新聞作りが初めての者ばかり、教授の方も活字媒体のサークルの担当になるのは初めてだと言った。「お互いに一緒に勉強してゆこう」ということで話は終わった。

酒の好きな人で、大学で授業や打ち合わせが終わると「君たちは時間があるかい」と体育館事務所を通じて連絡をしてることが良くあった。「よし、それでは少し飲みに行こう」となる。先生行き着けの店は大学グラウンド坂下の「志乃ぶ」だった。1年生の私たちは、当然、「志のぶ」を知らない。安部球場の下の細い路地を入った所にあっただが、最初の誘いの時には面食らった。清原さんに言われたままに向かったが店を探すのには多少時間がかかった。小さなしもた屋風の店であった。暖簾を潜るとおでんの鍋から出ている湯気や焼き鳥の煙が店一杯に旨さを撒き散らせていた。下町の典型的な飲み屋の佇まいだった。いつ行っても満席で席を確保するのが大変だった。客の大半は大学関係者らしい。店の中はせいぜい10人か15人も入れば満員になる狭い店である。この店は中年の女将さんが仕切っていた。何でもこの女将さんを通じて注文をし、勘定をしていた。ビールに日本酒が何種類か、それにおでんに焼き鳥、これらの食いが旨かった。自分も松井も酒は飲めないに等しく、もっぱらおでんや焼き魚、豊鯛の炙りなどを食べていた。

店には必ず清原さんの教授仲間か事務所の人間がいた。いずれにしても大学関係者が多い店だった。しかし、先生は決してそちらには行かず、あくまで自分たちと一緒に飲みかつ語っていた。そのへんは呑兵衛のしきたりなのかと感心した。1時間もすると先生は酩酊状態に入る。言っていることは明確だが、動作にやや覚束ない所が出て来る。これが一つのシグナルだった。松井と二人で「先生、送ります」と言って大

きな身体の清原さんを二人がかりで抱えて店の外へ出る。そこから先生の自宅に送るのが私たちの役目だった。「志乃ぶ」から豊川町の先生の家までは歩いては遠くはなかった。坂がいくらか上りになるとマンションだ。当時のマンションにはまだエレベーターがなく、階段を歩いて登らなければならなかった。この階段がなかなかの難所だった。二人で力一杯の力を出して4階まで上ったものだった。ベルを押すと、直ぐに奥さんがお出迎え。細身で上品な感じの人だった。

新聞会の相談ごとがあると、決まって松井と二人で先生のお宅に伺うようになった。大学から近いのが良かった。大学生にとって10分やそこらの歩きは何の苦痛もなかった。先生の書斎がいつもの話し合いの場だった。4畳半くらいの狭い書斎で、周囲の壁には本棚がぎっしり詰まっているため余計に狭い部屋に思えた。そこで大男の先生と小柄な学生二人が座っているので、夏の暑い日などは大変だった。時折、奥さんが運んでくれた冷たい飲み物の何と美味かったことか。先生は大きな声も出さずに淡々と話をする人だった。ある時、「自分は軽井沢の出身で追分に夏の家が2軒ある。1軒は使っていない昔の家だ。もし、君たちが合宿でもやるなら使っているよ」と言ってくれた。予想外の申し出に二人は「喜んで使わせてもらいます」と思わず言った。これが「早稲田スポーツ」最初の夏合宿の発端だった。

夏の1週間ほど、私たちは軽井沢追分の清原邸の離れで合宿を張ることになった。昭和35(1960)年の夏だった。その頃、「早稲田スポーツ」の部員は、創刊時以来のメンバーに加え、途中からメンバーに加わった同級生、さらに学年が上の葦澤元康、伊藤昌俊さん、さらに、4月の正規募集で入部した1年生4、5人を含め総勢15人くらいになっていた。合宿には福山龍介、本多統、高島寿郎、伊藤昌俊らを除いてほぼ参加したのではないかと。新聞といっても新聞制作について経験豊富な人間がいるわけでもなく、みんなで新聞を勉強する会だった。早く一通りの記事が書ける部員にすることが、新聞を長く継続するためには絶対条件ということで、勉強会に力を入れた。例えば、それぞれが「新聞記事の書き方」、「新聞割付のやり方」、「効果的な取材のしかた」などのテーマに沿って勉強したことを発表して質疑応答する方法で進めた。早稲田からマスコミに進む人が多いだけに、プロの適任者を見つけて合宿所に招待してレクチャーを受けたらとの意見も出たが実現しなかった。まだまだ、財政的にも無理だったのだ。現役新聞記者のレクチャーは大学の構内で聞いたような気がする。

信濃追分の清原別荘は後ろに浅間山が雄大なパノラマ状に控え、周囲は緑に覆われていた。隣が由緒ある浅間神社で、こんもりとした森の中にあった。毎日、煙を吐く浅間山を見ながら過ごすのもなかなかのものだった。周囲は昔ながらの村で中央に旧中山道が走り畑や森が多かった。清原別荘の右隣りには昔ながらの豆腐屋、佐藤豆腐店があった。朝、早い時間に起きてもすでに豆腐屋は仕事をしていた。西に行くと中山道と北国街道が分岐する「分け去れ」(追分)があった。追分の周囲には街道をゆく旅人の安全を祈願する小ぶりの石仏が多く点在していた。浅間山に向かってなだら

かな丘陵地帯が続いていた。追分は江戸時代の古い宿場町でもあった。まだ、砂利道の両側には旅籠の古い建物が残り、2階の出窓の格子からは今にも人が顔を出すのではないかと思わせる風情が残っていた。宿場の中央には旅館「油屋」がある。ここは大正から昭和に入って多くの文人が利用した宿だ。作家の堀辰雄は油屋にも泊まっているが、後に油屋近くに土地を買い求め家を建て晩年を過ごしていた。油屋の建物も風情があった。将来は油屋に泊まってみたいと思っていたものだった。清原別荘は1000坪もあろうかという広さであった。広い敷地の中を小川が流れていたのも印象的だった。清原さん一家は夏の休暇中、街道沿いの新しい家に住んでいた。奥様が草のぼうぼうと生える細い道から、車庫入れするのに悪戦苦闘していた姿をしばしば見かけたものである。旧中山道にはほとんど車が通らなかったのも、いくら清原夫人が車を屋敷に入れるのに難渋しても何の障害にもならなかった。

信濃追分の合宿に参加する私たち一行は揃って上野発の夜行列車で向かった。朝のまだ明けきらないうちに信越線は信濃追分駅に到着。追分駅にはまだ人の動きが全くない。駅は昭和初期にでも建築されたような雰囲気の良い木造だった。この先、誰も清原さんの別荘には行ったことがないので不安な道のりだった。浅間神社の隣だという清原さんの略図を唯一の手掛かりにみんなでぞろぞろと田舎の道を北に向かって歩いた。朝靄が深い中を浅間神社目指して進んだのである。

清原さんの別荘には清原さん夫婦と二人の娘さん、それに夫人の母親、つまりおばあちゃん（清原家ではグランマ）の5人が避暑に来ていた。陽が昇るにつれて屋敷の大体の輪郭がわかってきた。随分広い屋敷で、その屋敷の中を小川が流れている。庭もどこからどこまでが庭でどこからが隣の浅間神社なのか判らないほどだった。緑に囲まれた屋敷の南側にやや新しい建物があり、それが清原一家の使っている家だった。草ぼうぼうの北側にさらに1軒、茅葺の家があった。この茅葺の家こそ私たち一行が一週間過ごす田舎家の清原別荘別館だった。どっしりと重そうな屋根が何となく家を押さえつけている感じだった。清原さんの本宅から箒や塵取りを借りてきて家の大掃除に入った。それほど荒れている家ではなかった。聞けば、夏の間、たまに清原さんの知り合いが泊まりに来ているとのことで、部屋の中はサッパリとした感じに整理整頓されていた。

茅葺の家にはいくつか部屋があったが私たちは8畳と10畳くらいの部屋を使わせてもらうことにした。大きい部屋は私たち全員が寝泊りし、勉強もするメインルームだ。雑魚寝で何とか寝ることができた。信濃追分の朝は特に気持ちの良い空気が流れていた。清原別荘ばかりか村全体が清らかな空気に包まれていた。夏の朝はとにかく早い。朝靄が立ち込める中に清原別荘も建っている。しばし、霧の中である。私たちが寝泊りしていた茅葺の家は相当古い田舎家で、ちょうど清原一家が住んでいた母屋の背中にあるような位置だった。それでも家と家との間はかなり距離があった。従って、先生一家の動きも見えないし、向こうからも背中にある私たちの動向は分らな

い。それこそ、たまに奥さんの母親、つまりおばあちゃん、グランマが着物姿で庭を歩く姿を見るだけだった。

このグランマは、女性としては割合背の高い人で、清原教授もその血を引いていると思わせる長身だった。グランマは私たちが議論も済んで庭で休んでいると、よく現れて話に加わった。ある時、「せっかく、信濃追分に来ているのだから浅間山に登ったらどうですか」と言う。「朝、早い時間にここを出れば夜までには十分帰ってくるができる」と言う。私たちは直ぐに行くことに決め、翌々日、浅間登山を決行した。

新聞制作の勉強のための合宿だったので、登山道具など用意している者はいない。グランマは「それほど難しい山ではないから大丈夫。落石にだけ注意すれば簡単な山です」と言う。いとも簡単に話すグランマの一言が浅間登山決行のきっかけであった。「早稲田スポーツ」の大半の部員は運動靴、つまり、その頃言っていた「ズック靴」を履いていたので登山と言っても浅間山は大丈夫と言われた。当時、浅間山は白い噴煙を上げてはいたが、休火山と言われ噴火のことは一言も言われていなかった。清原別荘の裏道に当たる追分口を出て、白樺林の中を歩き樹木のないガレ場を通して山頂に登り、白糸の滝側に下る典型的なコースを辿ることにした。これもグランマの助言通りだった。

登山の日は晴天で雲ひとつない絶好の登山日和だった。全員が運動靴着用かと思ったら、何と安武はビニールのゴム草履のようなものを履いているだけの軽装だった。「いや、なんてことはない。大丈夫だ。絶対にみんなには負けない」と意気込んで登山に参加した。ぞろぞろと長い列を作って私たちは早朝4時には清原別荘をスタートした。朝の空気は爽やかで暑くもない。これはうまい日和に恵まれたものだと思んた黙々と歩いた。山崎がいくらか山登りの経験があるくらいで、他の部員は山登りをした経験はなかった。山崎がこの日のリーダーになった。彼はみんなに山の歩き方を登りながら教えて先頭を歩いた。自分にとってはこんな高い山は初めての経験で自信も何もなかった。それでもみんなから遅れるのは嫌だと思ひ懸命に歩いた。緩やかな白樺の林の中を歩き、それもいつまでも続けて歩くと、誰もが無口になる。真夏の太陽が頭の上にあったが林の中の道にはむしろ涼しげな空気が流れていた。

しかし、林を抜けると、浅間の山腹はいわゆるガレ場で樹木が1本もない石ころだけの登山道になる。先に行く者が足を滑らすとガラガラと小石が落ちてくる。小さい石だけならまだよかったが、次第に漬物石ほどの大きさの石も混じりだした。こんなものが頭に当たったらとんでもないことになる。まさに清原さんのグランマが言っていた「落石に注意」ということか、と初めて浅間のガレ場を歩いている最中に分かった。途中、心配だった草履履きの安武を見ると、それこそ夢中になって口も利かずに、どこで拾ったのか木の枝を杖代わりにして歩いていた。「足元は大丈夫だ」と言う。

ガレ場の窪みのような所に来て、白樺林の中の道でも会った女子高生者の一行に追

いついた。5、6人の集団だった。こちらは男ばかりの一行で歩いてきたので、この女性の一行は何か地獄で女神に会ったような気持ちになったものだ。学校の施設に泊まって、合間に浅間登山をしているという。彼女たちからももらったおにぎりの何と美味かったことか。私たちは一目散に浅間山頂を目指して小石がごろごろする歩きにくい登山道を進んだ。もうもうと白煙を吐く浅間の山頂は大きく神秘的だった。外輪を1周したのか半周でやめたのかはっきりとした記憶がない。多分、ひと回りして下りに入ったような気がする。下り道は登りに比べて遥かに楽で、みんなの足は速くなった。一気に半ば小走りになって下った。それでも一般道に着いた頃には陽はかなり傾いていた。全員が離れ離れになって勝手に歩いていた。それでも先頭はリーダーの山崎だった。自分も誰かと一緒になったが良く覚えていない。先頭からどのくらい離れていたのかも分からなかった。懸命に坂を下ってきたことだけが記憶に残っている。浅間山の麓の割合平坦な場所に来ると、誰とはなしに走り出した。中軽井沢に出て信濃追分までの距離も半端ではなかった。すっかり夜になった午後8時くらいに清原別荘に全員が到着した。一人として落伍者はいなかった。グランマは「よくやったね」と待っていてくれたのは嬉しかった。

結局、「早稲田スポーツ」の信濃追分合宿の思い出は浅間登山が一番だった。

31 会津・東山温泉合宿に遅れる大失態

—盛岡・佐々木大助さんのこと—

自分にとっては忘れられない合宿がもう一つある。それは3年生夏の会津若松・東山温泉千代瀧旅館での合宿である。自分が編集長をしていた時なので昭和36年(1961)夏のことである。忘れられない理由は合宿自体の問題ではなく、むしろ自分自身の失態に関する思い出である。その失態によって自分は所定の日までに東山温泉の千代瀧旅館に届かなかったのである。責任者が決め事を破ってしまっただけでは何とも始末が悪い。合宿自体にも少なからず影響を与えたことは責任者としての責任は重大であった。予め、千代瀧旅館に電話を入れ、松井をはじめ「早稲田スポーツ」の幹部には自分の遅れを報告しておいたがこの失態は何とも詫びのしようがないほどバツが悪いものであった。

東山温泉での合宿は、いよいよ安定運営に入った「早稲田スポーツ」の一層の結束を固めるためには重要な意味を持つものだった。「早稲田スポーツ」にとっても1・2・3年生の3学年にわたる部員が揃い、創刊期の6人という弱体体制からの脱却をも意味していた。さらに将来に向けて一層の拡大策を練るための合宿でもあった。後輩部員も含めて、いよいよみんなが新聞制作に慣れてきて、今後の方向を決めるには何をすれば良いかを議論する極めて重要な合宿だった。この合宿を東山温泉に決めたのはなぜだったのか。明確な記憶はないが、確か庭球部だったか軟式庭球部だったかにいた林さんという人が会津若松の人で、松井が情報を仕入れてきた。「夏の暑い日の会津

も良いよ。特に東山温泉の旅館は泊まりも高くなく学生の合宿にはいいのではないか」というものだった。合宿の前に松井と二人で、事前調査のために会津若松の林さんに会いに行った。当時は、明治維新期の城郭破壊のために会津城は石垣が残る単に高台があるだけだった。コンクリートの会津若松城が再建されるのは私たちが合宿の後だった。林さんの家はお城の前にある老舗の醸造屋だった。味噌醤油の製造をしていたと思う。林さんはその店(会社)の若主人になる人だった。親切に会津の話をしてくれたのを記憶している。運動部出身だけに親しみが持てた。千代瀧旅館も林さんの紹介ではなかったか。

東山温泉の合宿の前、自分はクラスの友人・野田敏之と二人で北海道旅行を行った。当時、夏休みの学生旅行は流行っていて、特に北海道が人気だった。この時の北海道旅行のスケジュールは、当然、合宿に間に合うように作った。スケジュール通りに行けば、何の問題もなかったのである。ところが、旅に出れば何が起ころるか分からない。事の起こりは旭川近くの層雲峡近くであった。同伴の野田が体調不良を言い出した。このトラブルについては別項でも書いた。旅の行方にはさらにいろいろなことが起こった。友人の体調は快方に向かったものの、北海道を回って本州に戻った十和田南で二人は分れ、別行動をとることになった。野田は佐渡島に行き、自分は盛岡経由で会津若松に向かう計画だった。

北海道内の旅行はまずまず順調だった。特に、網走で後輩の堀健雄君と遭遇したことは驚きだった。しかも彼が親しく話をしていた女性二人が、自分たちが札幌からのバスで一緒だった京都の女子学生だったから一層驚いた。道東・然別湖でも面白いことがあった。友人の野田と二人で、たまたま知り合いになった静岡から来たと言う女子二人とそれぞれボートを借りて沖合に漕ぎだした時のことである。深い緑に囲まれた然別湖は何とも美しかった。そんな時、突然、沖合から「ニシカワサーン」という呼ぶ声があった。こんな山中の湖の中で知り合いはいない。呼ぶ声の方を見ると、何と「早稲田スポーツ」の後輩部員で札幌出身の中津海光夫(札幌西高)だった。彼は短いシャツ1枚でボートを漕いでいた。典型的な若者スタイルだった。彼は「こんなところで何をしていますか」と笑いながら言った。ちょうど、自分の隣に若い女性が乗っていたのでそう言ったのかもしれない。中津海は然別湖畔に泊まっていた。ボートで沖から湖畔まで帰るところだった。網走に次いで然別湖でもびっくりすることが起きたのだった。広い北海道でなぜこうした偶然のような出来事が重なるんだろう、と驚くほかはなかった。

野田と北海道二人旅を終え、青函連絡船に乗って青森に戻り、バスで十和田湖を回った。十和田南で二人は分れ別行動をとることにした。自分は盛岡に出て会津若松の合宿に行く予定だった。この頃にはまだ十分に余裕があった。十和田南駅から花輪線で盛岡に出て東北線、磐越線(東線、西線)を乗り継いで会津へ出る計画であった。しかし、またまた偶然が起こった。最初の偶発は列車の中で差向かいに座った母娘と

の出会いである。列車内で母親からお菓子や果物、それに握り飯までご馳走になった。小学生らしい娘も優しかった。盛岡に用事があるのだらうと思っていた時、突然、母親が家に寄っていかないかと言う。まだ盛岡のかなり手前の駅である。親切にしてもらっていたので、無碍に断れず短い時間ならと応じた。花輪線の荒屋新町という駅だった。これが間違いのもと、向かった先は母親が現在住む家ではなく、実家(生家)であった。ちょうど、お盆の時、寄った家では久しぶりに来た妹を家主(母親の弟)は大歓迎で迎えた。そこに列車で一緒になった自分も同伴、家主は妹と同様、自分にも親切でお盆のご馳走をしきりに進める。1時間以上も母親の実家に滞在した。急いで花輪線に戻り、東北線の好摩駅で乗換えて、渋民駅で下車する予定であった。渋民で下車する理由はもちろん、石川啄木遺跡を回ることにあり、今回の旅行のメインテーマにもしていた。渋民駅に到着した時にすでにこの日のうちの会津若松到着は怪しくなっていた。渋民駅から啄木遺跡がある旧渋民村まで行くにはかなりの距離があり、歩く以外方法がなかった。かなりの距離を歩いて啄木が通った渋民小学校や北上川畔に建つ啄木歌碑をやっと見ることができた。昭和36年当時の渋民村、すでに玉山村になっていたが全く素朴な村で、当然、人通りもなく、まして車などほとんど通らなかった。急ぎ足で村を回り、また急いで歩いて渋民駅まで戻る。盛岡駅に着いた時にはすでに夜だった。駅前の簡易ホテルに泊まるほかはなかった。

会津若松へは早朝の東北線を使ってゆけば、集合時間には遅れるが、何とか夕方までには到着できると考えた。列車が出るまでは有効に時間を使って盛岡市内を回ろうと決めた。当時は携帯電話もなく、千代瀧旅館に電話をするほかはなかった。それでも朝6時には起きて飯を済ませ、7時には宿を出た。この段階では、東山温泉に昼過ぎには楽に着く予定だった。効率的に盛岡市内を回ろうと市内循環のバスに乗るため駅前のバス停に行った。早い時間で並ぶ人も少なかった。「不来方城」に行くにはどこで降りればよいかを前の人に聞くと、ウンと唸っている間に後ろにいた人が応えてくれた。手には風呂敷包みを持っている。この人が親切な人で、自分が案内しようと言ってくれた。不来方城には若い頃に啄木が作った歌を刻んだ歌碑があり見たかったのである。こんな朝早く仕事帰りとは一体何をしている人なのかと躊躇していると、その素朴な感じの人は先になってバスに乗り、しばらくして停留所で降りた。こうなっては一緒に降りて、その人に付いて歩くよりほかはなかった。歩きながら聞くと、盛岡生まれ盛岡育ちの国鉄の機関士で、今朝は明け番でいま家に帰る途中だという。時間はあるし、多少、啄木を調べているので、あえて「不来方城」の案内を申し出たと言う。不来方城を聞く人がいるなど今では珍しく嬉しくなったと言う。結局、午前中いっぱいこの人と一緒に盛岡市内を歩いた。自分が東山温泉の宿に着いたのは集合時間をはるかに越えた深夜になってしまった。しかし、翌日からの「早稲田スポーツ」合宿のスケジュールは何とかこなすことができた。